

# 上海セント・ジョーンズ大学スポーツ小史 (1890–1925)

高 嶋 航

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| は じ め に .....           | 303 |
| I スポーツの発展 .....         | 305 |
| II 軍事訓練と体育 .....        | 325 |
| III 国旗事件とスポーツの政治化 ..... | 333 |
| お わ り に .....           | 336 |

## は じ め に

---

西洋の近代的スポーツはいつどのように中国に持ち込まれ、受け入れられたのか。スポーツの伝播／受容の問題はスポーツの歴史だけでなく、近代化や文化交渉の観点からも重要かつ興味深い問題であるが、中国の場合、その探究はいまだ十分になされていない。本稿で取り上げるセント・ジョーンズ大学は中国でもっとも早く運動会を開いた学校としてしばしば言及される。定期的な運動会や競技会の成立はスポーツの定着、制度化を示す重要なメルクマールである。中国スポーツの黎明期におけるセント・ジョーンズ大学の位置づけは明治日本の第一高等学校に相当するといえようが、その実態はほとんど明らかにされていない<sup>(1)</sup>。じつはセント・ジョーンズ大学に関しては豊富な資料が存在し、その現場をリアルタイムで眺めることができるのである。中国のスポーツの原風景を忠実に復原すること、これが本稿の主たる目標である。

そもそも中国の伝統的身体観からすれば、スポーツはほとんど理解できないものである。それを彼らはどのようにして受け入れたのか。この点については、すでに本稿の姉妹編である「東亜病夫」とスポーツ」で論じたので参照されたい<sup>(2)</sup>。セント・ジョーンズの教師（＝宣教師）はキリスト教化の前提としての西洋化を目的としてスポーツを導入したが、中国

人学生は身体を鍛錬し規律化することで、富国強兵、救国の目的を果たそうとした。つまりスポーツは両者の同床異夢の上に成立した。そしてその背景には、西洋と中国という非対称な関係から生み出された男性性をめぐる葛藤があった。さらにスポーツの受容は、たんにスポーツという行為だけでなく、それを成り立たせる身体観、世界観を受容することでもあったことを明らかにした。

本稿ではその次の段階、すなわちスポーツがもはや正当化を必要とせず、それ自身追求に値するものとして発展していく過程を具体的に跡づけていく。第1節では競技種目ごとに、その導入、展開の具体的状況と、校内および校外におけるスポーツの組織化の状況を明らかにする。第2節では、スポーツと密接な関係を有する軍事訓練と体育について検討を加える。続く第3節では国旗事件とそれに続く上海スポーツ界の再編を扱い、セント・ジョンズのスポーツがナショナリズムの前に挫折を余儀なくされたことを示す。

本論に入る前に、セント・ジョンズ大学と資料についての簡単な紹介をしておこう。セント・ジョンズ大学はアメリカ聖公会のミッション・スクールで1879年に設立された。当初は「聖約翰書院 St. John's College」という名称で、初代校長はシェルシェウスキー (Samuel Isaac Joseph Shereschewsky)、初年度の学生は39名であった。学校は上海の中心から遠く離れた梵王渡 (Jessfield) にあり、三方を蘇州河で囲まれていた。2年後シェルシェウスキーは体調を崩し、中国人牧師顔永京が主たる校務を担った。1888年、若干24歳のポット (Francis Lister Hawks Pott) が第2代校長に就任、以後1941年まで校長を務めた。1892年に大学に相当する正館が設置され、高等教育機関である正館は3年間、中等教育機関である備館 (以下、中等部と称する) は4年間の課程であり、1895年に最初の卒業生、胡浚康、曹福賡、呉任之を送り出した。1905年にはアメリカで大学の登記をおこない、正式な大学として認められ、セント・ジョンズ書院はセント・ジョンズ大学 St. John's University となった (以下、両者の区別が必要とき以外はセント・ジョンズと称する)。1913年には大学院が設置される。1936年に男女共学となり、1947年に国民政府に登録した (それまでは名実ともにアメリカの学校であった)。1952年のいわゆる「院系調整」によってセント・ジョンズの名は消え、現在は華東政法大学となっている。学生数は1907年に大学60名、中等部203名、1910-1911年度が大学101名、中等部197名、1915-1916年度が大学204名、中等部246名、1920-1921年度が大学231名、中等部260名であった。初期の学生は貧しいキリスト教家庭の出身者がほとんどであったが、1920年までにその割合は20-25%に落ち、商業界の裕福な家庭の出身者が過半を占めた<sup>(3)</sup>。学費も高く「貴族学校」の異称を有した。

本稿の主たる材料である『セント・ジョンズ・エコー』は1890年3月に創刊された校内

雑誌である。当初は双月刊で、1904年秋から月刊となり、のち季刊となった。最初は英文のみであったが、1905年に中文版『約翰声』が加わった。イエール大学図書館に英文版のみ創刊号から1925年までが所蔵されており、中国では華東師範大学に1893年から1937年まで、上海社会科学院図書館に1905年から1937年まで、上海図書館に1908年から1937年までの分が所蔵されている。今回はイエール大学で収集した英文版を主たる資料とする。ただし調査時間の関係上、1920年までと、1921年の一部しか目を通すことができなかったもので、主たる考察対象は1920年までとする。もちろんこれは便宜的な措置ではあるが、中国スポーツ界でセント・ジョーンズが主導的役割を果たした時期はほぼカバーしている。というのもセント・ジョーンズの相対的な優位はすでに1910年代後半から失われつつあったからである。スポーツ界におけるセント・ジョーンズの権威失墜を象徴するのが1925年の国旗事件であった。

近年、セント・ジョーンズに対する関心が高まり、重要な著作の刊行が続いている。たとえば、熊月之、周武主編『聖約翰大学史』（上海人民出版社、2007年）、楊禾豊「聖約翰大学の校園生活及其変遷（1920-1937）」（博士論文、復旦大学、2008年）、上海聖約翰大学校史編輯委員会組編、徐以驊主編『上海聖約翰大学（1879-1952）』（上海人民出版社、2009年）などである。いずれも総合的な著作だけに、スポーツへの言及はきわめて限られている。

## I スポーツの発展

---

セント・ジョーンズはアメリカ系の学校であることから、スポーツもアメリカ式であった。1915年から1916年のシーズンに例をとると、最初のイベントは10月2日の金陵大学との野球戦である。10月は野球のシーズンで、11月から12月までがサッカーのシーズンとなる。バスケットボールは3月から4月、野球は4月から5月、陸上競技は4月から5月、テニスは5月から6月初におこなわれる。このうち正規の大学対抗試合は11-12月のサッカー、5月の陸上競技、5月の野球、5月から6月初のテニスである。日本とはちがいシーズン制であった。各競技のシーズンが近づくと、キャプテンが選挙で選ばれ、メンバーの召集がおこなわれる。そしてトライアウトにより学校代表チームのメンバーを決める。試合の曜日を見ると、土曜日が多く、日曜日におこなわれることはない。この点はミッション・スクールだけあって、キリスト教の安息日が忠実に遵守されている。対戦相手はミッション系の学校が多く、中国人、西洋人いずれの場合もあった。こうした状況がどのようにして定着したのか、以下、競技ごとに見ていこう。

## 1 陸上競技

セント・ジョンズで開かれた最初の運動会に関する資料は1930年に書かれた「聖約翰大学自編校史稿」が唯一のものである。

1890年5月20日、李藹門先生〔Samuel. E. Smalley〕の協力により、学校で運動会が組織され、礼拝堂の前で挙行された。規模は貧弱であったが、学生は喜び勇んで参加し、精神は大いに尊敬に値する。ただ当時こうした行為をあまり上品でないと考える人がいた。この後定例となり、毎年春秋2回開かれ、それなりの訓練をした。中国の学校で運動会を開いたのは、じつにセント・ジョンズ大学が嚆矢であった。

この記事が書かれたのは運動会から40年後のことであり、その信憑性については疑問の余地があるが、1891年7月の『セント・ジョンズ・エコー』に「運動会は1年に春と秋の2回開かれている」と記されていることから、おおむね正しいと考えてよいだろう<sup>(4)</sup>。1890年5月に最初の運動会が開かれたとすれば、この記事が報じる1891年の運動会は通算3回目、春としては2回目のものである。すでに年2回の開催が定例となっていることからして、1890年春に運動会が開かれたのはほぼ確実であろう。

表1に挙げるのは1891年春におこなわれた運動会の記録である。これは中国人の記録としてはもっとも古く貴重な資料であり、全記録を引いておく<sup>(5)</sup>。

種目はショート・ラン、走高跳、走幅跳、二人三脚、ロング・レースの5つで、種目により14歳以上と14歳未満に分けられていた。各種目の1、2位の名前が列挙されるだけで、記録については言及がない。競走では距離すら不明である。また、ここに挙げられている名前はすべてファーストネームであり、アットホームな運動会という印象を受ける。陸上競技の歴史は「運動会」が「競技会」へと変わっていく過程としてとらえることができる。以下、時系列に運動会の競技会化の状況を見ていこう。

記録が最初に現れるのは1893年秋の運動会からで、走高跳に3フィート10インチ（約117 cm）、走幅跳に11フィート3インチ（約343 cm）の記録が残っている<sup>(6)</sup>。おそらく中国人による最初の陸上競技記録である。時間の記録が登場するのは1895年秋の運動会からである。この時の種目はショート・ラン（75ヤード）、二人三脚（75ヤード）、袋跳び競走、ハードル走（75ヤード）、ジャガイモ競走、走幅跳、ロング・レース（150ヤード）、走高跳で、ショート・ランで11秒、ロング・レースで22秒という記録が残されている。またハードル走がはじめて採用された<sup>(7)</sup>。1899年11月11日におこなわれた運動会に関して、『セント・ジョンズ・エコー』は「全体として今回と前回の間に著しい改善が見られ、

表1 1891年春の運動会記録一覧

| SHORT RUN |                   | THREE LEGGED RACE |                           |
|-----------|-------------------|-------------------|---------------------------|
|           | (over 14 years.)  |                   | (over 14 years.)          |
| 1st.      | New Ching.        | 1st.              | Loong San.                |
| 2nd.      | Wae Tuk.          |                   | Yoon Tsung.               |
|           | (under 14 years.) | 2nd.              | Sih Sung.                 |
| 1st.      | Tsz Kwae.         |                   | Ching Foo.                |
| 2nd.      | Mu Tz.            |                   | (under 14 years.)         |
|           |                   | 1st.              | Tz Kwae.                  |
|           |                   |                   | Yoon Kin.                 |
| HIGH JUMP |                   | 2nd.              | Nion Zung.                |
| 1st.      | New Ching.        |                   | Zau Ziang.                |
| 2nd.      | Kwae Sung.        |                   |                           |
| LONG JUMP |                   | LONGRACE          |                           |
| 1st.      | New Ching         |                   | (over 14 years.)          |
| 2nd.      | Tz Kwae           | 1st.              | Wae Tuk.                  |
|           |                   | 2nd.              | Yoon Tsung.               |
|           |                   |                   | (under 14 years.)         |
|           |                   | 1st.              | Ve Hiang.                 |
|           |                   | 2nd.              | Ve Ching and Tsung Ziang. |

出典：SJE, July 20, 1891.

学校が精神的、宗教的のみならず身体的にも進歩していることを証明している」と述べ、記録への固執が芽生えはじめていることをうかがわせる<sup>(8)</sup>。

1900年6月9日には南洋公学（校名がしばしば変更するため、以下「南洋」で統一する）との対抗戦がおこなわれた。クーパー（Frederick C. Cooper）に率いられたセント・ジョーンズの一行は、笛や太鼓のバンドをともない、校旗を携え、南洋までの2マイルの道のりを1時間かけて行進した。試合は午前10時にはじまり、午前11時半に終了した。観衆には女性も混じっていた。種目はショート・ラン（75ヤード）、ボール投げ、走幅跳、ロング・レース（220ヤード）、二人三脚（75ヤード）、ハードル走、綱引きである。220ヤードという陸上競技の正式な種目が登場したことに注目したい。各種目の1位に2ドル、2位に1ドルが贈られた。セント・ジョーンズが完勝し、のち外交界で活躍するハワイ華僑のフィリップ・刁腓力（刁作謙）はボール投げに優勝している<sup>(9)</sup>。また75ヤード走、220ヤード走に優勝した麦恵安、ハードル走を制した鄭肇桐もハワイ華僑であった。ハワイ華僑はセント・ジョ

ンズにアメリカ式のスポーツを持ち込み、スポーツの普及に貢献した<sup>(10)</sup>。一方、南洋では1897年に赴任したファーガソン（John Calvin Ferguson）が軍事訓練、サッカー、野球、テニスなどを導入し、1899年の冬に最初の運動会を開催していた<sup>(11)</sup>。この対抗戦に向けて2、3週間前から練習をしていたようだが、セント・ジョンズの学生に言わせれば、「もっと長い練習期間が与えられていたら、きっと今よりずっといい成績を残せたはず」であった。一行はファーガソンから食事に招待され、午後2時に南洋をあとにした。

1902年秋の運動会から棒高跳とリレーが導入された<sup>(12)</sup>。1903年春の運動会では75ヤード走の記録が「8秒1/2」となっており、ストップウォッチが使用されたことがわかる。これは従来言われていたよりも5年ほど早い事例である<sup>(13)</sup>。同年秋には75ヤード走が100ヤード走に改められた<sup>(14)</sup>。1904年春、譚郇山が砲丸投げで28フィート10インチ半の記録を出し、「カレッジ・レコード」を破った<sup>(15)</sup>。同年11月17日、第1回大学対抗陸上競技会が開催され、セント・ジョンズ、東呉大学（Soochow University）、中西書院、南洋が参加、それぞれ56点、21点、12点、10点を獲得し、セント・ジョンズの圧勝に終わった。当時の様子を朱友漁（1905年学部卒、1907年文学士取得）は次のように語る。

私は学部時代、大学の運動競技に忙しかった。……1904年、ニューヨーク州ローチェスターのセント・ポール教会牧師アーサー・S・マンがわが校の教授陣に加わった。彼は棒高跳、ハードル走、ハンマー投げ、スパイク・シューズの使用など大学運動競技の近代的側面を導入した。一時私は短距離、そして走高跳、棒高跳の大学記録保持者であったが、それらはたいしたものではなく、まもなく若い学生たちのより素晴らしい記録に取って代わられた。私の神学クラスには3名の学生しかいなかった。譚郇山は大柄でたくましい男で、数年にわたって砲丸投げとハンマー投げの記録を保持していた<sup>(16)</sup>。

マンは1899年にイエール大学を卒業し、1904年にセント・ジョンズに哲学教師として赴任したが、1907年7月29日に廬山で溺れた友人を助けようとして溺死した<sup>(17)</sup>。わずか2年余りであったが、朱の回想に見えるように、マンは当時最先端のスポーツをセント・ジョンズに持ち込んだのである。1905年に中等部に入学した馬約翰は当時の運動会をこう語る。

1位から3位までは賞品が授与され、個人選手権〔もっとも多く点数を獲得した個人〕には金メダルが授与された。こうして奨励したにもかかわらず、少数の学生しかスポー

ツやゲームをしに出てこなかった。そこで〔運動を〕鼓舞するため、クラス対抗のゲームと競技会が導入され奨励された。このアイデアはまんまと当たり、翌年には運動場での練習に大きな興奮と熱狂が見られた。級長はチームを練習に狩り出すために必死の努力を払った。大会の日が来ると、学校全体が学年選手権の獲得へむけて動いているかのようにであった。全教員が動員され、審判の役を果たした。全員の両親が招待され、競技で子供が活躍するのを見た。勝利に輝いた息子のもとに歩み寄ったとき、彼の顔にはかつてない大きな誇りと愛情が見られた<sup>(18)</sup>

陸上競技を奨励するためにほかにも様々な措置が取られた。バートン（H. B. Barton）は中等部の学年対抗競技の優勝学年にセント・ジョージ杯を贈った。馬約翰は自分の1マイル走の記録を破ったものにメダルを与えることを約束した<sup>(19)</sup>。1904年に思顔堂が落成したが、その2階の大会堂には競技記録を一覧にした額が掲げてあった<sup>(20)</sup>。

南洋は徐々に力をつけ、1906年11月16日に開かれた第3回大学対抗競技会の成績は、セント・ジョーンズ36点、南洋30点、中西書院18点、東呉大学15点で、セント・ジョーンズの辛勝であった<sup>(21)</sup>。

1910年10月18-22日、南京で「全国学校区分隊第一次体育同盟会（First Chinese National Athletic Sports）」が開催された（のち第1回全国運動会と追認される）。大会を運営したのは中国 YMCA 関係者で、上海から40名、蘇州・南京から31名、武漢から28名、華南から28名、華北から20名が参加した。競技は地区対抗（高等組と中等組）と学校対抗で競われ、高等組地区対抗では上海が99点中52点を獲得して圧勝した。学校対抗ではセント・ジョーンズと南洋が激しい首位争いを演じ、勝負は最後の種目である800ヤード・リレーに持ち込まれた。結局セント・ジョーンズが37点を得て優勝、2位は南洋34点、3位は天津の普通中学堂（YMCA, Tientsin）10点であった<sup>(22)</sup>。

1913年2月、マニラで極東オリンピックが開催され、中国からは約40名の選手が参加した。セント・ジョーンズからは韋憲章、韋煥章、李茂祥の3名が参加、そのほか上海 YMCA の高恩養、清華学校の黄純道、潘文炳はいずれもセント・ジョーンズの元学生であった。韋煥章は走幅跳、120ヤード・ハードル走で優勝、220ヤード走で2位に入った。6名のセント・ジョーンズ関係者は中国が陸上競技で獲得した36点のうち26点を挙げた<sup>(23)</sup>。

この年の春の運動会に円盤投げが導入され、120ヤード・ハードル走はロー・ハードルからハイ・ハードルに改められた。いずれも極東オリンピックの基準に沿うものである。国際大会への参加によって標準化が進んだのである。韋煥章は220ヤード・ハードル走で27秒4/5の記録を出したが、これは「極東オリンピック記録よりもよい」ものであった（極

東記録はフィリピンのロサダが出した28秒3/5)。こうして運動会は校内行事に止まらず、極東オリンピックを頂点とする競技の体系のなかに取り込まれていった。しかし一方で学外の陸上競技大会が整備されてくると、学内運動会の競技会としての意義は薄れていった。

1914年5月9日、セント・ジョンズは江湾のオープン競技会に参加した。440ヤード・リレーでは上海最強を誇る万国商団（Shanghai Volunteer Corps）のアメリカ中隊チームを僅差で破った。万国商団チームはこの敗北に驚くと同時に、セント・ジョンズの勝利を称えた。セント・ジョンズは主将の韋煥章がねんごで欠場したため優勝は逃したものの、その実力は外国人にも十分に認められたのである<sup>(24)</sup>。

1915年5月、地元上海で第2回極東選手権競技大会（極東オリンピックを改称。以下、極東大会と記す）が開かれることになった。セント・ジョンズでは4月24日に運動会が開催され、そこで優秀な成績を収めた選手が、5月1日に華東六大学体育連合会（East China Intercollegiate Athletic Association）の主催によりセント・ジョンズで開かれた第2回華東大学対抗競技会（中国語名は「六大校連合運動」）に参加した。セント・ジョンズは33点を獲得、2位の南洋に15点差をつけて圧勝した<sup>(25)</sup>。この大会で優秀な成績を収めた選手が極東大会中国代表に選ばれた（当時全国予選会はなかった）。『進歩雑誌』所載の中国代表選手名簿と対照すると、馮建維、韋煥章、楊錦輝、姚醒黄（姚星煒）、姚福仁、謝国華、姚麟書、林語堂、林祖光、余衡之、董選青、李迪云、楊德宝、袁根初、譚瑞文らがセント・ジョンズの学生と推測される<sup>(26)</sup>。文学者として著名な林語堂は当時の様子を次のように述懐している。

私はテニスを学び、サッカーの学校代表チームに参加した。私はハワイから来た男子学生ケネス〔Kenneth B. Young、楊錦輝〕に野球を学んだ。彼は私に浮く球と沈む球の投げ方を教えてくれた。特筆すべきは、私が1マイル走の校内記録を打ち立て、極東大会に参加したことだが、ただ勝利にはほど遠かった。学校当局はこうした経験が私にとって大変有益であると考えていた。私の父は当時上海にいて、運動場へ私を見に来たが、私が競技に参加することにひどく不賛成だった。というのもそれは知能の競争とはなんの関係もなかったからだ<sup>(27)</sup>。

学校当局と父親の態度の違いが印象的である。社会全体から見れば、スポーツの意義はまだあまり理解されていなかった。『セント・ジョンズ・エコー』を調べると、林は学校の運動会で5分29秒の記録を出している（極東大会では郭毓彬が4分50秒4/5で優勝した）。以前の記録を見ると、Zi Tsing-ming という学生が1913年の校外の大会で5分19秒

1/5の記録を出しており、林の記録は校内運動会の新記録という意味のようである。ともかくセント・ジョーンズから多くの学生が極東大会に参加したのだが、これは地元開催のためであり、中国代表におけるセント・ジョーンズの地位は2年前とは比較にならないほど下がっていた。

第一、南人の体育は北人に劣っている。今回の運動のうち陸上競技でしばしば首位に列した李如松〔協和〕、郭毓彬〔南開〕、黄文道〔清華〕、吉子英〔匯文〕、凌達揚〔清華〕らはみな北人である。第二、中国人が運営する学校の体育の成績は外国人の運営するものに及ばない。今回の運動で優れた地位を占めたのは北京の匯文（12点）、天津の南開（8点）、北京の清華（9点）、通州の協和（7点）、蘇州の東呉（5点）、上海のセント・ジョーンズ（7点）の諸校で、みな外国人の運営する学校である。上述の諸校と肩を並べることができたのはわずかに上海の南洋公学のみである<sup>(28)</sup>。

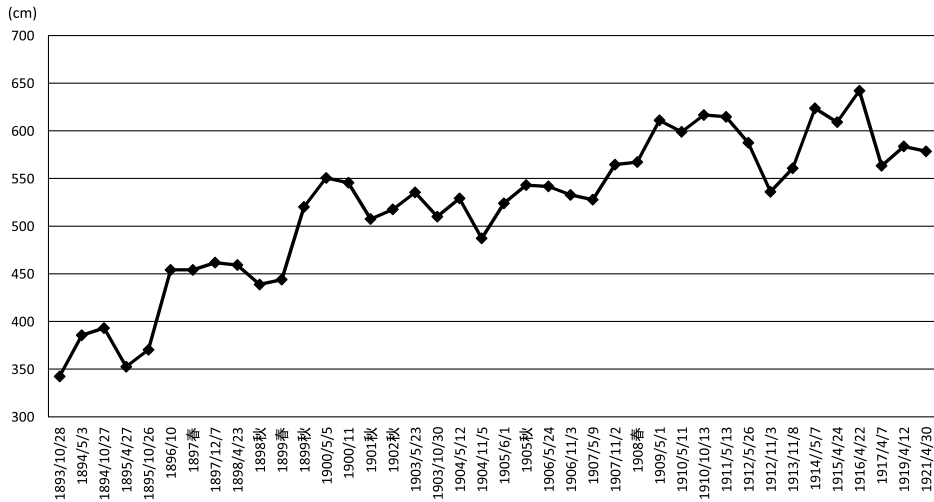
そして1917年4月21日、ついに常勝軍（Ever Victorious Team）の最期の日が訪れる。

セント・ジョーンズの競技の歴史でもっとも悲しい出来事は、代表が華東大学対抗陸上競技の優勝旗を得られない時である。……我々はずいにわがコーネル杯を1年間南洋に貸し与えることに同意した。その時期が終われば高い利率でそれを取り戻すつもりである<sup>(29)</sup>。

コーネル杯はすぐには戻ってこなかった。南洋は3年連続で優勝した。1920年は5月15日に開催される予定だったが、学生ストライキのため中止となった<sup>(30)</sup>。1921年は復旦大学が優勝した。それはセント・ジョーンズと南洋以外の学校による初めての勝利であった。上海の陸上競技は新たな時代を迎えたのである。セント・ジョーンズは1925年に優勝するが、その直後に国旗事件が起きた。

最後に記録の面からセント・ジョーンズにおけるスポーツの発展の状況を見てみよう。表2は1893年から1921年までの校内運動会における走幅跳の記録である。30年というスパンで見れば、記録が着実に向上していることがわかる。より細かく見ると、辛亥革命後と1917年に記録が大きく落ちている。前者はスポーツの運営体制の刷新をもたらした（320頁参照）。1917年の下落の原因は定かでないが、この年に「常勝軍」が南洋に敗北を喫し、その後も低迷したと符合する<sup>(31)</sup>。

表2 校内運動会の走幅跳記録



出典：SJE, 1893–1921.

## 2 野球

1872年から1875年にかけて清朝は120名の留学生をアメリカに送った。ハートフォードにいた梁敦彦、詹天佑、蔡紹基らは1876年に Oriental Baseball Club を結成した。なかでも梁丕旭（梁誠）はアンドーヴァー学院、イエール大学でサウスポー投手として活躍した。1881年、あまりにも西洋文化にかぶれた留美幼童は学業半ばにして帰国させられることになり、その途次オークランドで地元チームと試合をして勝利を収めたというから、実力の方もなかなかであったと見える<sup>(32)</sup>。帰国後は野球をすることもなかったが、1890年代に一度だけアメリカ海軍の水兵と試合をおこない、2対2で引き分けたことがあった<sup>(33)</sup>。

では中国で最初に中国人が野球をしたのはいつだったかという点、通説はおおよそ以下のように説明する。1895年、北京の匯文書院ではアメリカ留学生の曹泳帰医師を招聘してボランティアで野球の指導をしてもらった。同年、セント・ジョンズではホノルルから来た華僑学生たち、麦惠安、楊錦魁、刁腓力、邱道生らが野球を伝え、通州の協和書院でも野球がおこなわれた<sup>(34)</sup>。いずれも1895年をはじまりとする点で一致している。

セント・ジョンズは1891年6月6日にパブリック・スクール（工部局西童男校）と野球の試合をして23対38で破れたが、これは「我々がイギリスの少年とおこなった最初の試合」であった<sup>(35)</sup>。1895年までセント・ジョンズに在学した顔惠慶は当時の野球の様子を次のように語っている。

我々のなん人かは、グローブもマスクもその他の防具も一切なしで、自家製のボールと即席のバットを使って、不正規のダイヤモンドで、原始的な野球のようなものをしていた。試合は多かれ少なかれ野球のルールに合わせたが、ボールを走者に投げる機会が試合の最大の楽しみであった。もし走者に当たれば、彼は「アウト」になった。一度そんな球が私のこめかみに当たったことがある。私は走っていて、あまりにきつく当たったので、実際になん分間か意識を失い、他の選手たちを大いに心配させた<sup>(36)</sup>。

やがて野球はセント・ジョーンズの主要なスポーツの一つとなる。運動場も拡張され、道具や設備も整備されていった。自らの技術を試す機会をうかがっていた彼らは、1903年6月に Shanghai Baseball Club から挑戦状を受ける。結果は3対22の大敗であった<sup>(37)</sup>。次に対戦したのは東亜同文書院である。1904年5月7日のことである。東亜同文書院側の記録を引いておこう。

新緑色濃く遊心勃々たる時、彼檄を我に飛ばして野球試合を挑む。彼や広闊なるグラウンドと、完備せる器具を有し、戦争の余榮に誇れる日人、いでや一泡吹かして呉れむとの意気込みにて、錬磨回を絶たず、斯くてぞ勝は我ものなれと自信せる後、雄々しくも名乗りを揚げたるなり。我は之に反し、野球に適恰なるグラウンドとてはなく、器具の類も挙ぐべきものは有せず。嗚呼此道に嗜好を有する者の漫然ボールを弄するに過ぎず。然れども敵に一旦名乗を揚げられて、後ろを見するは、朝日に匂ひ桜と散る大和武夫の採らざる所、乃ち仮令譽れある月桂冠は戴き得ずとするも、見苦しきわざして、敵の笑ひを求めずば以て足るとの望もて、承諾の旨を伝へ、期に先だつこと四日、Mgr. 犬飼、石田、及び撰手三隅の三氏は、敵軍のキャプテンと南洋公学に会し、商量する所あり、五月七日午後、我撰手は石田犬飼森田の三氏と共に、St. John's College の後庭に赴き敵に見参す。此戦已に我に七分の損あり。且彼には外人の応援盛なり。此勝敗如何は直ちに当地居住の日人に影響するのみならず、延ては本国にも及ぶ。撰手諸氏の苦心亦察すべきなり、我には当校生徒の大部分応援す。而して敵軍の Mgr. Walker 氏、之が審判に当る<sup>(38)</sup>。

いかにも威勢のいい文章である。第一高等学校の運動部と文芸部の対立を論じた鈴木康史は、運動部の言説のなかにしばしば見える「壮」という言葉に着目し、「悲憤慷慨」的な漢文調のスタイルが、国家、勤儉尚武、質実剛健といった価値観と結びついていたこと、それを大正教養派と呼ばれる人びとが言文一致のスタイルで個人の内面に沈潜してゆくな

かで、個人、悲哀煩悶、閑雅優長といった価値観へと変えていったことを指摘する。その過程で政治的暴力的な壮士が非政治化して健全なる主体へと変化し、学校の、国家のための「運動競技」が、自己のための「スポーツ」へと変化したという<sup>(39)</sup>。つまり、スポーツのあり方とその文体には密接な関係があるというわけである。東亜同文書院の文章はこの文脈で理解できる。彼らはまさしく日本のために戦ったのだ。それに比して、セント・ジョンズ側の記録はじつにあっさりとしたもので、ナショナリズムは微塵も感じられない。東亜同文書院の記録を信じるならば、セント・ジョンズの学生もこの試合にナショナルスティックな意味づけを見だしていたことになる。それが『セント・ジョンズ・エコー』の誌面に表れないのは、英語の能力の問題か、感情を抑えて書いたのか、たんに負けたから詳しく書かなかったのか、のいずれかであろう。ただこうした傾向はスポーツ記事全般について見られるので、民族的対立を煽るような記述を故意に避けたと考えるべきである。その意味については後段で触れたい。また、鈴木議論が中国の状況にどこまで適応できるかは今後考えていきたいが、少なくとも中国では文体以前に言語の問題があった点は、日本と大きく違う点であろう。ともかく、双方とも相当に意気込んで臨んだこの試合は2対21でセント・ジョンズがまたも大敗した。このときセント・ジョンズでセンターを守っていたのが馬約翰であった。

対外試合の初勝利は5月28日の南洋戦で、47対6で大勝した<sup>(40)</sup>。東亜同文書院とはこの後もなん度か対戦した。1905年6月は11対13、1906年5月は2対3といずれも惜敗した<sup>(41)</sup>。東亜同文書院の『会報』では、その後6月26日にセント・ジョンズと試合をしたが、「大勝を得、此試合細記するの価なきを以て略す」と記され、翌年5月20日にも広東街練兵場で対戦したことが記される（スコアは不明）。一方、『セント・ジョンズ・エコー』では1906年12月号に東亜同文書院と対戦したが、日本側が審判の判定に異議を唱えたため、没収試合となり、スコア上は9対0でセント・ジョンズの勝利ということになっている<sup>(42)</sup>。ともかくこれが両校による最後の試合となった。

1907年以降、野球は校内で細々とおこなわれていたようであるが、正式な代表チームを結成することはできなかった。1909年の『セント・ジョンズ・エコー』は「アメリカでもっとも人気のあるスポーツである野球がいささか人気を失いつつある」と野球の衰退を指摘している。最大の問題は対戦相手の不足である。野球チームを有する中国人の学校はほとんどなかった。また外国人との試合には辮髪の問題があった。というのも辮髪をした人間は（試合会場となる）競馬場に入ることが許されなかったからである。1911年初頭の段階で、300名あまりの学生のうち20%が辮髪を切っていた。辛亥革命後の1911年12月には150名の学生が辮髪を切った。ほとんどの教員も辮髪を切り、「服従、古色蒼然、

男らしくない」象徴とおさらばした<sup>(43)</sup> (図1)。

その少し前の1911年9月16日、セント・ジョンズに久々に対外試合の機会が訪れた。相手は上海野球リーグの選抜チームで、うち6名がリーグ1位のレッド・ソックスの選手であった。辮髪問題にも関わらず今回の試合が成立したのは、セント・ジョンズの教員で上海リーグの選手でもあるスタイガー (George Nye Steiger) やバートンらのとりなしがあったからである。セント・ジョンズはピッチャーにスタイガー、ショートにバートンを据え、高恩養、楊錦輝ら中国人学生も5名が参加した。名前から判断すると高恩養以外はハワイ華僑であろう。試合は9回表で逆転を許したものの、なかなかの接戦であった<sup>(44)</sup>。

1913年春、バートンが野球の再導入を試みたが、失敗に終わる。極東オリンピックをはさんで重要な陸上競技の大会が数多くおこなわれたが、球技の選手はほとんどが陸上競技の選手だったからである。1914年の秋、滬江大学 (Shanghai Baptist College) と野球の試合がおこなわれ、39対3でセント・ジョンズが勝った<sup>(45)</sup>。1915年1月の『セント・ジョンズ・エコー』は野球が復活しつつあることを報じ、「アメリカ人が創設した学校で、アメリカの国技がまったく見られないのはいささか不思議である」と述べた。1916年5月の『セント・ジョンズ・エコー』は野球がふたたび人気を得るようになり、選手たちは午後になると練習をしていると記している。ある学生は野球の価値について、「犠牲バント」に示されるように、野球は個人主義的な精神を克服してチーム精神を養うことができ、忍耐など道徳的教訓を得ることもでき、のちの人生に大いに役立つと述べている。ただ、修得に時間がかかることが問題であった<sup>(46)</sup>。結局、野球はセント・ジョンズにおいても、



図1 第1回全国運動会学校対抗陸上競技に優勝したセント・ジョンズ・チーム。うち何人かは断髪している。

出典：SJE, January, 1911.

そして中国においてもマイナー・スポーツに止まった<sup>(47)</sup>。

### 3 テニス

中国在住の西洋人は早くからテニスを楽しんでいたが、中国人がテニスをはじめた時期はよくわかっていない。『中国近代体育史話』は1885年前後に北京の匯文、通州の協和、上海のセント・ジョンズ、広州の嶺南、香港のミッション・スクールなどでテニスがはじまったとする<sup>(48)</sup>。

『セント・ジョンズ・エコー』にはじめてテニスの話が登場するのは1892年のことである。学生たちがテニスを習いはじめ、毎日午後になると練習をした<sup>(49)</sup>。テニスはセント・ジョンズの全期間を通じて、もっとも人気のあるスポーツの一つであった<sup>(50)</sup>。足取りがよろよろとしてサッカーに向かない、目が悪くて野球ができない、そんな本の虫たちもテニスなら長いガウンや長い爪をあまり気にせずにいられた<sup>(51)</sup>。ネット、ボールなどはすべて学校が支給し、紛失した場合は学生が弁償した。サッカーや野球も同様に、ユニフォームや靴は学校が準備した<sup>(52)</sup>。1913年以降は学生がラケットを自分で準備することになった。1919年の時点で、半数以上の学生がラケットを持っており、20面のテニスコートを有していたが、それでも学生の需用を満たすには十分ではなかった<sup>(53)</sup>。

1898年にはじまったステンハウス杯（校内テニス大会の優勝者に与えられる）は実力の向上に寄与した。最初の授与者は刁腓力であった<sup>(54)</sup>。1907年5月29日には最初の対外試合が東呉大学との間でおこなわれた<sup>(55)</sup>。1910年10月に開かれたいわゆる最初の全国運動会で、テニスの準決勝に残ったのは、潘文炳、許耀光、馬約翰、林全誠で、全員セント・ジョンズの学生だったため、協議の結果、それ以上試合をしないことにした（彼らは他の競技にも参加しなければならなかった）<sup>(56)</sup>。大学対抗競技会でもセント・ジョンズはほぼ一貫して優勝し続けた。

### 4 サッカー

中国人のサッカーの起源についてはいくつかの説がある。『中国近代体育史話』は1880年代ころ香港の快樂村の官立小学の学生がイギリス人のサッカーを見よう見まねではじめたのを嚆矢とする。『中国体育通史』は同じ話を1890年代とし、官立学校が「育才」と「王寧中」であった、とより詳しい記述をする<sup>(57)</sup>。いずれも典拠は示されないが、サッカー好きのイギリス人の影響をうけて、香港で早くからサッカーがおこなわれていたのは間違いなからう。香港については、管見の限り確実な資料として、香港の皇仁書院の校内雑誌『イエロー・ドラゴン』（1900年4月）を挙げることができる<sup>(58)</sup>。学校内の3つの6人制サッ

カーチームの一つに「Choi Chan Fan」なる中国人らしき名前が見える。さらに1904年には中国人のサッカーチームが誕生した<sup>(59)</sup>。

上海では1901年にセント・ジョーンズにサッカーチームが誕生したというのが定説だが、『セント・ジョーンズ・エコー』によれば、サッカーがはじまったのは1896年初頭のことである。

学生たちは自身のために新しい娯楽を見つけた。Foot Ball がなん度かおこなわれたが、まだ正式なクラブは設立されていない<sup>(60)</sup>。

『中国的足球揺籃』は1895年に麦惠安、楊錦魁、刁腓力、邱道生らホノルルから来た華僑学生が陸上競技やサッカーを正式のものに近づけ、この基礎の上に翌年隊員を選んでサッカーチームを設立したとする<sup>(61)</sup>。これも典拠がないので判断がつかないが、3年後には冬の娯楽として「野球、クローケー、サッカー」が挙げられ、サッカーが定着したことがわかる。1898年夏に校内に競技団体がつくられた際にもサッカーが含まれていた<sup>(62)</sup>。

最初の対外試合の記録は1902年11月で、Dockyard Engineers に0対3、Shanghai Rangers に3対4で負けている。11月16日の対中西書院（Anglo-Chinese School）戦が中国人同士最初の試合と目され、4対1でセント・ジョーンズが対外戦初勝利を収めた<sup>(63)</sup>。

最大のライバル、南洋との最初の試合は通説では1903年とされる。たとえば『交通大学校史』は「1903年にはじめてセント・ジョーンズ大学サッカーチームと試合をしたが、結果は負けだった。1904年にセント・ジョーンズと再び試合をしたが、本校はまたもや敗北した。2度の敗北により学校はサッカーを重視するようになり、サッカー部が成立した」と説明する<sup>(64)</sup>。また『上海交通大学紀事』は最初の試合のスコアを1対7としている<sup>(65)</sup>。『セント・ジョーンズ・エコー』によれば、最初の試合は1904年1月1日（陰暦1903年11月14日）におこなわれ、3対0でセント・ジョーンズが勝っている<sup>(66)</sup>。しかも南洋公学の対戦相手は「second team」、つまりセント・ジョーンズの二軍であった。1905年冬の南洋戦は7対1であり、『上海交通大学紀事』はこのときの記録と取り違えているのかもしれない。この頃南洋に在籍した蔣夢麟は、南洋公学中等部がファーガソンのアドバイスによりアメリカのハイスクールにならって運営されていると述べ、学校の様子を次のように語る。

大学は西洋のプランに従って配置され建設されていた。本館は中央に時計台があり、それは数マイルも向こうから見る事ができた。一連の建物の前には広大なサッカー場があり、手入れの行き届いた芝が青々していた。学校当局はサッカーと野球を奨励

し、学生はたいていゲームやスポーツに熱中していた。大学対抗陸上競技会が年に2回開催され、数千の観客が観戦した<sup>(67)</sup>。

南洋は急速に力をつけ、1908年3月21日の試合は1対1の引き分けであった。その1年後、1909年3月27日、セント・ジョンズは0対6で「これまで我々がどんなこと、いやすべてのことで非常にたやすく打ち破ってきた」はずの南洋に完敗した。試合までに2回しか練習ができなかった、というのがセント・ジョンズ側の言い訳であった<sup>(68)</sup>。この頃セント・ジョンズに在籍した馬約翰は次のように言う。

サッカーとは手当たり次第にボールを蹴ることを意味した。というのも、正規の試合は学生たちには理解するのが困難だったからである。40-50フィートの高さまでボールを蹴ることができるものはみな素晴らしいと見なされ、学友たちから称賛されたのだ<sup>(69)</sup>。

この記述から推測すると、技術的には未熟だったのだろう。ただ馬約翰によれば、中国人学生は伝統的な遊戯である羽根蹴りのおかげで足の技術は秀でていたとのことである<sup>(70)</sup>。戦前の極東スポーツ界で中国がサッカーに圧倒的な強さを見せたのも、こうしたところに原因を求めることができるのかもしれない。

セント・ジョンズと南洋の一戦は「ハーバードとイエールのようなアメリカのビッグゲーム」を彷彿させるものとなり、「南洋を我々のグラウンドで打ち負かすのはそれほどすごいことではない。しかし彼らのグラウンドで彼らに勝利するのは本当の喜びである」とのセント・ジョンズの学生の言葉が示すように、両校は互いに強いライバル意識を持った<sup>(71)</sup>。

ある南洋でおこなわれた試合での出来事である。セント・ジョンズが3対1で勝利を収めた。セント・ジョンズの学生は600名、南洋側は800名、このほか一般の観衆が数千名いた。セント・ジョンズの学生が喜びのあまりヤジを飛ばしたことが原因で、両校の学生の間で喧嘩がはじまった。セント・ジョンズの選手は危険にさらされ、警察を呼び出して保護してもらわねばならなかった。南洋にはセント・ジョンズ出身の教員が2人いたが、彼らが翌日授業に来ると、学生たちはさっそくその教員の車を破壊した。教員は恐れて校長室に隠れ、暗くなってから校長につきそわれて学校を離れねばならなかった。馬約翰はこの逸話を学校精神の負の側面の事例として紹介し、外国人教員がスポーツマンシップを教えることを怠っていたためだと指摘している<sup>(72)</sup>。

1910年以降、実力的にはおおむね南洋が優勢に立ち、1914-1915年度にはじまった華東

六大学体育連合会主催の選手権では、1920-1921年度までに、セント・ジョーンズは1917-1918年度と1920-1921年度の2度しか優勝できず、あとはすべて南洋が制した。

1920-1921年度の最後の試合は1920年12月22日（水曜日）に<sup>マーカム</sup>麦根路の滬寧鐵路体育場でおこなわれた。セント・ジョーンズと南洋はシーズンに2回ずつ、ホームとアウェーで対戦し、1勝1敗になった場合は公平を期してこのフィールドで対戦することになっており、今回は1915年以来2度目の出来事であった。7000名の観衆を前に、午後3時にキックオフ、前半終了5分前にセント・ジョーンズの主将巖寿康がゴールを決めた。後半、セント・ジョーンズの攻撃中、南洋はタイムを要求したが認められず、孟慶徴が2点目のゴールを挙げた。南洋は抗議したが、外国人審判は却下した。その後南洋が1点を挙げ、2対1でセント・ジョーンズが勝利した。大東旅社で祝宴を開き、市内を自動車でパレードし、学校に戻った。学校では提灯行列が彼らを出迎えた。提灯行列に参加した蘇公隽は、普段近づくことのできない姉妹校セント・マリア学院の正門にさしかかったとき、2階に集った女子学生が拍手歓呼しているのがほの見え、凱旋したローマの戦士のように感じたことを70年以上のちに回想している<sup>(73)</sup>。その後、盛大なたき火のまわりで演説や喝采がおこなわれ、校歌を歌って終了した<sup>(74)</sup>。日本の旧制高校の「ストーム」を彷彿とさせる光景である。

## 5 バスケットボール

他のスポーツと違い、中国にバスケットボールが導入された過程ははっきりとわかっている。バスケットボールは1891年末に考案された新しいスポーツで、その考案者であるYMCAが普及に務めた。天津YMCAのライアン（David Willard Lyon）は1895年12月8日に天津YMCAの創立式典の前後にバスケットボールの模範演技を披露した。これが中国におけるバスケットボールのもっとも早い記録とされる。中国人がバスケットボールの試合をした記録は、現在確認できるかぎり1896年3月28日のものがもっとも早い<sup>(75)</sup>。上海では1908年に来華したYMCA体育主事エクスナー（Max J. Exner）がバスケットボールの普及に努めた<sup>(76)</sup>。バスケットボールは、1910年10月の全国運動会の際には正式種目に採用されなかったものの、華北、上海、呉寧（蘇州・南京）の3チームが公開試合をおこない、華北が優勝した。華北チームは陸上競技の選手からピックアップして編成した急ごしらえのチームであった<sup>(77)</sup>。

このスポーツがセント・ジョーンズに現れるのは1912年になってからである。

バスケット・ボールは大学で急速に人気のゲームとなりつつある。最近、クラス対抗で多くの熱戦が繰り広げられ、乱戦のなかでなかなかの技能が示された<sup>(78)</sup>。

しかしこの試みは失敗に終わった。主たる理由は、それが「バスケット・ボールの試合」というより「<sup>フルファイト</sup>闘牛」のようだったからである。

1916年に再びバスケットボールが導入された<sup>(79)</sup>。1916年4月の『セント・ジョンズ・エコー』は、はやくも南洋と2度の親善試合がおこなわれたこと、最近導入されたにもかかわらず急速に人気を博しつつあることを報じている<sup>(80)</sup>。1917年春には大学対抗競技会にバスケットボールが採用された<sup>(81)</sup>。1919年には Shanghai Amateur Basketball League に加入した<sup>(82)</sup>。

このほかセント・ジョンズでおこなわれたことが確認できるスポーツに、クローケー<sup>(83)</sup>、サイクリング<sup>(84)</sup>、ゴルフ<sup>(85)</sup>、バレーボール(1915年に導入<sup>(86)</sup>)、ハンドボール<sup>(87)</sup>、ローラースケート<sup>(88)</sup>、ボート<sup>(89)</sup>、<sup>ボクシング</sup>拳術<sup>(90)</sup>、クリケット、ホッケー<sup>(91)</sup> などがある。

## 6 スポーツの組織化

1896年、アスレチック・クラブが組織された。この時点では学外のチームとの対戦は夢のまた夢であった<sup>(92)</sup>。

1898年、ポット校長の提案に基づき、シニアとジュニアの体育協会(Athletic Association)が結成された。正館(大学部)の学生ならだれでも加入でき、会費は年1ドルであった。夏の時点でテニスと野球が主な活動であった。体育協会は5名からなる委員会によって運営された。1900年1月19日に開かれた総会には50名が参加し、張錫良が議長をつとめた。新年度役員の選挙がおこなわれ、会長に刁腓力、秘書に陳孚卿、会計に呉清泰が選ばれた<sup>(93)</sup>。1913年にスポーツの運営体制が大幅に変更された。それまでは1人の外国人教師があらゆる種目のトレーナーをつとめていた。各競技の主将は、1人の非常に優れた人物に集中する傾向があった。そして彼がマネージャーとしての役目もこなさねばならなかった。その結果、1912年はほとんど試合がおこなわれず、スポーツに対する関心も激減した。ポット校長はこの事態を改善したいと考え、3人の外国人教師が顧問となり、陸上競技、テニス、サッカー、野球の各競技に主将とマネージャーが1人ずつ立てられることになった。当該年度の役員は表3の通りである<sup>(94)</sup>。

1913-1914年度末までに規約が作成され、St. John's University Athletic Association が正式に発足した。幹部人事は会長にバートン、副会長に韋憲章、秘書に朱文瑞、会計に W・ポット(William S. A. Pott、ポット校長次男)、副会計に董選青が選ばれた。執行委員会はこの4名に加えて、サッカー、テニス、陸上競技、野球の主将、マネージャーと、中等部4クラスから各1名の代表、教員から1名の代表で構成された<sup>(95)</sup>。ポットが改革を提唱した背景には、1913年に East China Intercollegiate Athletic Association が設立され、定期的

表3 1913-1914年度セント・ジョーンズ体育協会役員一覧

|        | 陸上競技             | テニス             | サッカー            | 野球           |
|--------|------------------|-----------------|-----------------|--------------|
| 顧問     | Charles F. Remer | William S. Pott | William S. Pott | H. B. Barton |
| 主将     | 韋憲章              | 徐逸民             | Yoen Lien       | 楊錦輝          |
| マネージャー | 朱文瑞              | 董選青             | 張石麟             | 林祖光          |

出典：SJE, October, 1913.

に大学対抗競技会を開催するようになったこと、1914年秋に上海で極東オリンピックが開催される予定であったことがあり<sup>(96)</sup>、スポーツ界の急速な発展のなかで、アメリカのように勝利至上主義に走り、本当のスポーツマンシップを見失うことがないように予防したいという考えがあった<sup>(97)</sup>。実際、1912年11月3日におこなわれた運動会では「いくつかの不愉快な事件」が起きており、その年のシニア個人選手権授与が取りやめになっている。運動会不振の理由については、多くの優秀選手が卒業したことにくわえ、「健全な競争の不在」「練習不足」を挙げ、スポーツマンシップを身につけること、衛生に留意すべきこと、あらゆることに手を出すべきではないこと、少しの成果に満足せず練習を続けることが挙げられている<sup>(98)</sup>。

改革のもう一つの意図は、スポーツ面で学生により多くの自治を与えることにあった<sup>(99)</sup>。学生たちはクラブの運営を通して民主主義の意義を理解したであろう<sup>(100)</sup>。1915年に規約の修正がおこなわれ、教員は役員に就任できないことが決まった。その結果、1915-1916年度の役員は、会長が楊錦輝、副会長が徐逸民、秘書が周曰庠、会計が袁良初、副会計が徐肇鈞と、すべて学生が担当することになった<sup>(101)</sup>。

1920年9月24日の規約改正で、執行委員のメンバーに大学、中等部の各学年から1名ずつ選ばれた計8名の代表が加わった。各部の主将、マネージャーは依然執行委員に含まれるが、投票権はなく、役員に就任できないことになった<sup>(102)</sup>。これに先立ち、体育協会と学生との関係が問題になっていた。学生たちは年間4ドルの体育費を支払うが、その用途に対する不満が高まっていた<sup>(103)</sup>。学外競技が盛んになるにつれ、体育費のほとんどが学外競技に費やされ、自分たちは恩恵を受けていないと感じる学生が増えていた。また選手は朝の体操を免除され、特別の食堂で栄養たっぷりの食事を供与されるなど、種々の優遇を受けていることにも不満が募っていた<sup>(104)</sup>。そのため学校の代表選手に対して、プロであるとか、アマチュアではないとか、ジェントルマンではないという批判が出ていた。すでに体育協会は1920年3月20日付けの決算を『セント・ジョーンズ・エコー』に掲載し、その使途を明らかにしていたが、不満を鎮めるにはいたらなかった。いずれにせよ、1919

年にクーパー記念体育館が完成したことにより、体育事業全体を見直す時期が来ていた。9月24日に協議した結果、体育協会は学外競技を担当し、体育館の活動や、学内のスポーツ、娯楽に関しては関与しないことになった。さらに一般学生の意見をより反映させるため、体育協会の役員規定を改正して、運動部中心の運営を改めた<sup>(105)</sup>。こうしてスポーツは学校全体の事業と位置づけられたのである。

最後に体育協会が公表した決算を紹介しておきたい。この種の資料は非常に珍しく、またその活動の具体像を知るのにまたとない資料だからである<sup>(106)</sup>。決算は体育協会の会計が授受した分と、事務所が授受した分に分れる。まずは体育協会会計分について見ていこう。収入は300ドルですべて銀行からの受け取りである。支出はテニス部に21.55ドル、サッカー部に132.62ドル、バスケットボール部に44.4ドル、野球部に10ドル、一般経費に35.84ドルで、計244.41ドル、55.59ドルの黒字となっている。支出の主要な項目は交通費（チップを含む）、試合での飲食費、通信費、人件費（テニスのボール拾い）、写真代、ユニフォーム代、文具代などである。事務所の収入は948.57ドルで、内訳は学生から930ドル（体育費か？）、テニスの入場料や中古品の売上げなどが18.57ドルで、ここから300ドルを体育協会会計に支出し、その黒字分55.59ドルを引いた額、704.16ドルが総計としてあげられている。支出はテニス部に34ドル、サッカー部に196.2ドル、バスケットボール部に23.4ドル、陸上競技部に9.5ドル、野球部に15.39ドル、一般経費に130.47ドルで、計408.76ドル、295.4ドルの黒字となっている。支出の主要項目はボールなど用具関係が多く、面白いものでは金メダル9.5ドル、ストップウォッチ13.8ドル、負傷者のレントゲン代5ドル、などがある。

次に学外スポーツの組織化について見ていこう。

上海周辺のミッション・スクールでスポーツが盛んになり、学校間での競技会がおこなわれるようになるにつれ、競技会を統轄する機関が必要になってきた。

西洋でオリンピック（Olympic Games）と学校対抗スポーツが国家の異なる地域をより密接に結びつけ、身体鍛錬をおろそかにすべきではないことを世界に示すのに成功したことは、広く認められている。当地の主要な大学はその重要性を認識し、その必要性を感じ、東呉大学、中西書院、南洋公学、セント・ジョーンズの4大学から4名の代表が、わが校で最初の会議を開いた<sup>(107)</sup>。

かくてIAA（Intercollegiate Athletic Association）が成立した。第2回目の会議では、会長に東呉大学のスマート（R. D. Smart）、副会長に南洋の胡詒穀、秘書にセント・

ジョンズのウォーカー (Millidge P. Walker)、会計に中西書院のホワイトサイド (Joseph W. Whiteside) が選出された<sup>(108)</sup>。スマートはヴァンダービルト大学時代、万能選手として活躍した経験があり、東呉大学でスポーツを推進していた<sup>(109)</sup>。唯一の中国人胡詒穀はセント・ジョンズの卒業生で、在学時は『セント・ジョンズ・エコー』の編集者をつとめ、卒業後に南洋で英語教師をしていた。

脇道にそれるが、先ほどの記事にオリンピックという言葉が出てくることに着目したい。というのも、中国人がオリンピックの存在を知ったのはいつかについて様々な見解が示されているからである。羅時銘のまとめによると、もっとも早くにこの問題を提起したのは阮蔚村『中国田径賽小史』(1933年)で、クーベルタンが李鴻章に第1回オリンピック参加を呼びかけたとする。羅はこの1896年説を否定し、『中西教会報』庚子六月の「巴黎賽会、各院安置与賽各物、現將次告竣。毎日入内觀賽之人、実繁有徒、以故頗形擁擠云」という記事から1900年説をとる<sup>(110)</sup>。しかしこの記事は明らかにパリ博覧会(パリ・オリンピックは博覧会の一部であった)の状況を伝えたもので、オリンピックとは関係がない。薛文婷は羅の説を批判したうえで、1907年説を支持した<sup>(111)</sup>。このほか1904年説があり、『女子世界』の「大運動会」なる記事に基づくものであったが、この記事は羅が指摘するとおりオリンピックとはまったく関係がない。また馮玉竜は1904年の天津『大公報』に「<sup>オリンピック</sup>垂力必嬉賽力会」、すなわちセントルイス・オリンピックへの言及がなされていると述べるが、その根拠は示されていない<sup>(112)</sup>。『セント・ジョンズ・エコー』の記事は現在のところオリンピックに関するもっとも早い資料とすることができよう。『セント・ジョンズ・エコー』には1904年秋の運動会の勝者について「彼らは〔古代ギリシアの〕オリンピック・ゲームの勝者ほど神聖であるとみなされていないが」と記す記事もある<sup>(113)</sup>。

話を元に戻そう。IAA が主催した最初の競技会は、1904年11月24日の陸上競技会であった<sup>(114)</sup>。第2回は1905年11月9日に南洋で、第3回は1907年11月16日に東呉大学で、第4回は1908年5月14日にセント・ジョンズで、第5回は1909年5月14日に東呉大学で開かれた<sup>(115)</sup>。このほか IAA 主催のテニス大会が1907年からはじまっている<sup>(116)</sup>。1911年は大学対抗競技が全面的に中止されたため、結局1909年の大会が最後となった。IAA が解散した原因について YMCA 体育主事のスワン (Alfred H. Swan) は「不和<sup>フリクション</sup>」と証言している<sup>(117)</sup>。

1914年1月2日、YMCA の呼びかけで華東の体育機関の代表 (YMCA、セント・ジョンズ、南洋、ナショナル・レクリエーション・クラブ、華童公学、育才公学、中西書院、極東体育協会、東呉大学) が集り、ECAF (East China Athletic Federation) の設立に向けた会議を開いた。緊急の課題は5月に北京で開催される第2回全国運動会への選手団派遣であっ

た。役員の選挙もおこなわれ、会長に海軍上将の薩鎮冰、副会長に東呉大学のスマート、名誉会計に極東体育協会の聶其煒（曾国藩の外孫）、名誉秘書にスワンが就任した。聶、スワンとも YMCA の人間であり、ECAF は YMCA 主導の組織といえた。YMCA は上海を中心にスポーツの普及につとめていたが、教育機関でないため IAA に参加することができず、不満を抱いていたようで、これを機会に上海スポーツ界における主導権を握ろうとした。

一方、スマートは IAA の復活を目論み、2月頃からセント・ジョンズ、金陵大学、南洋、滬江大学、呉淞商船学校（校長は薩鎮冰。1915年に海軍部が接收）、之江大学に連合運動会の開催を呼びかけていた。連合運動会は5月16日に東呉大学で開催され、南洋、金陵大学、セント・ジョンズ、之江大学、東呉大学が参加した。その前日の会議で ECIAA（East China Intercollegiate Athletic Association）の設立が決定し、上記5校に滬江大学を加えた6校が参加した<sup>(118)</sup>。中国語の名称は「華東六大学体育連合会」である。スワンは ECIAA の設立について多くを語らないが、YMCA 主導に対する反発があったのではないだろうか。ECAF は極東大会が終わると自然消滅したが、ECIAA は1920年に復旦大学、東南大学を加え、「華東八大学体育連合会」に発展し、華東地区の中核的スポーツ統轄機関に成長した<sup>(119)</sup>。

## 7 スポーツ施設

学内運動会は1890年に始まったが、その場所について『セント・ジョンズ・エコー』はなにも語らない。「聖約翰大学自編校史稿」は「礼拜堂前」と記しており、学内の空きスペースを利用しておこなわれたことだけは確かなようである。初期の野球、サッカー、テニスなども、そうした場所でおこなわれたのだろう。黎宝駿は1895年に鐘樓前の空き地にテニスコートが作られたと述べるが、確証はない<sup>(120)</sup>。1897年に教師の住宅を撤去した後の空き地を利用してグラウンドが拡張された。1899年に体育館が完成したが、それは少年たちにとって「全くの新奇」に属した<sup>(121)</sup>。1902年にはポット校長の尽力により、24畝の土地を借りて運動場とした<sup>(122)</sup>。1907年には校友会（1900年設立）の寄附で蘇州河の向かい側に新しいグラウンドが建設された<sup>(123)</sup>。1911年、校友会からの寄附金をもとに、セント・ジョンズは南側に広がる兆豊花園の一部（学校とジェスフィールド路の間の約70畝）を取得し、その一部を操練場とした。操練場では軍事訓練のほかゴルフもおこなわれていたが、1913年には大学生専用のテニスコートに変わった<sup>(124)</sup>。1915年夏にサッカー場と9面の（テニス用？の）土のコートが新設され、翌年にはテニスコート3面が整備され、古い体育館がハンドボール場に改まった<sup>(125)</sup>。1919年11月15日に当時の最新の設備を備

えたクーパー記念体育館が落成した。建設資金約5万ドルは、主として校友会などの寄附によってまかなわれた<sup>(126)</sup>。

## II 軍事訓練と体育

### 1 軍事訓練

「聖約翰大学自編校史稿」は1883年の出来事として、「学校はだんだん体育方面の設備を重視するようになり、体育用具を若干購入し、あわせて兵操用に「仮銃」50丁を購入した」と記す。この資料はポット校長の口述を整理して作成されたものだが、1883年はポットの赴任前のことで、他の記事に比べて信頼性は落ちる。ただ、1883年には清仏戦争が起こっており、一時的に学園内に軍事への関心が高まった可能性はある。仮にこれが事実だとしても、後の状況から考えて、兵操はほどなくして顧みられなくなったと思われる<sup>(127)</sup>。

1895年4月の『セント・ジョンズ・エコー』に次のような記事がある。

Mr. F. C. Cooper は6年間義勇兵ヴォランティアをしていたが、いま大学生と〔中等部の〕3年、4年の学生に軍事訓練をしている。それはたいへんよい運動で、我々の多くは楽しんでいる<sup>(128)</sup>。

クーパー自身は軍事訓練を導入した経緯について、1899年に「日清戦争終結直後、わが学生の間に軍事への熱狂がわき起こったのを利用して、我々はある学年の学生に軍事訓練のトレーニングをはじめた」と述べており<sup>(129)</sup>、日清戦争の敗北という出来事がセント・ジョンズの学生に軍事に対する関心を引き起こしたことがわかる。

1915年11月5日、セント・ジョンズで最初の大隊デーバタリオンが催されたとき、「セント・ジョンズでもっとも古いカデット」と言われていた Mr. Mao が軍事訓練導入前後の状況を語った。その内容を『セント・ジョンズ・エコー』は次のように記す。

数十年前、セント・ジョンズにはサッカーも、野球も、テニスも、その他いかなるゲームも存在しなかった。気晴らしとちょっとした身体の運動のために、Mao 氏とその学友は毎日午後になると小さな運動場スポーツに集って、自分たちで訓練を学び実践したものだ。彼らは竹の棒をライフルの代わりにし、ほろきれを旗の代わりにし、さらに面白いことに、石油缶を打ち鳴らして太鼓の代わりとした。こうして彼らはにぎやかに行進し、ブリキの太鼓で校内に大きな騒音を作り出した。それはなんと可笑し

く馬鹿げた光景だっただろう。Mao 氏によれば、こうやってセント・ジョンズで軍事訓練がはじまったのである。大隊の最初の司令官はほかならぬ、故クーパー教授〔1915年没〕であった<sup>(130)</sup>。

1910年の同窓生名簿を見ると、Mao 姓の人物は Mau Z Tsing (毛士俊) ただ一人である。当時彼は杭州の仁和高等学堂英語教師であった。Z-tsing の名は1896年秋の運動会に見え、二人三脚、ロング・レース、ショート・ランで優勝している<sup>(131)</sup>。以上から Mao 氏とは毛士俊とみなしてよからう。毛の話はまさしくクーパーの言う「学生の間に軍事への熱狂がわき起こった」という状況に一致する。

軍事への熱狂は、軍事訓練を報じた『セント・ジョンズ・エコー』の同じ号に「The Life of a Soldier」と題する小論が掲載されていることからわかる<sup>(132)</sup>。この文章は「わが国では兵士になることは奨励されるところか軽蔑されている」が「兵士の生き方はまったく悪いというわけではなく、多くの場合良いものであり、軽蔑すべきものではなく、一般に尊敬すべきものである」という一節ではじまり、兵士の良さは筋肉を鍛えて強い人間になれることで、平和時には病気もなく健康に過ごせ、危機の時には自らを守ることができる、また兵士は国家の守護者、人民の慰撫者であり、尊敬すべき賛美すべき存在なのである、と伝統的な兵士観を否定する。同年8月の『セント・ジョンズ・エコー』はその表紙に、「中華帝国の国章」である竜が学校を取り囲む図案を採用しており<sup>(133)</sup> (図2)、こうした民族意識の高まりのなかで、中国人学生の側から軍事訓練がはじまり、それを学校当局が利用したのである。

同年夏には大学全体が訓練のもとにあり、ダンベルとインディアン・クラブ (体操用棍棒) による運動もおこなわれていた。ライフルが揃うまでは竹棒を代わりに用い、まもなく制服もできるはずであった<sup>(134)</sup>。同年12月には4つの中隊で構成される正規の大隊が設立され、冬用の制服が支給された<sup>(135)</sup>。新たに設立された義勇軍は、1月23日の卒業式で日頃の訓練の成果を披露した。検閲にあたったアメリカ人大尉は、これまで見たなかで、他のどの西洋式訓練をうけた中国人軍隊より優れていると絶賛した<sup>(136)</sup>。ほどなく新入生を迎えた学園では、新入生に対する軍事教育がはじまった。

毎週火曜と木曜の午後5時15分から午後6時まで、新入生に対して軍曹が軍事教育をおこなっている。目新しいのを喜ぶものもいるが、すこし恥ずかしがるものもいる。ほとんどのものはいかなる種類の身体運動も経験したことがなく、それゆえ彼らを訓練するのは忍耐を要する仕事である<sup>(137)</sup>。



図2 新しい図案の表紙

出典：SJE, February, 1907.

クーパーは「規律、正確さ、組織」を植えつけることが軍事訓練の意義だと述べる。これらは国民として不可欠な資質であるが、中国人には欠如しているものであった<sup>(138)</sup>。しかしすべての学生がその意義を理解したわけではない。次の引用文は軍事訓練をはじめて3年後のものである。

わが校で軍事訓練が導入されて以来、学生の体面が傷つけられるとして、軍事訓練に対する偏見や非難が続いている。……また我々が反逆者、将来中国政府を転覆するような人間になるであろうという理由で異議が唱えられている。これはじつに致命的な間違いである。なぜなら我々の主要な目的は……中国に対して反逆するのではなく、中国を改革する仕事にふさわしい人間にすることにあるからだ<sup>(139)</sup>。

1903年に入学した学生たちは、入寮翌日から軍事訓練の洗礼を受けた。

午前7時、彼らは訓練に参加するように言われた。パルマー少佐は畏敬の念を感じ

させる。彼のギラギラ輝く目とすさまじい声は、新入生を恐怖で震え上がらせた。10分後、「再集合」の合図が鳴り響き、新兵特訓班は解散した。……「いやあ指が凍ってしまうよ。こんなに寒いのに指を出したままにさせられたのだから」とある少年が叫ぶ。「顔をまっすぐ上にあげたままにしていたから、首が痛いよ」と別の少年が答える<sup>(140)</sup>。

パルマー少佐とは1901年に赴任したアメリカ人英語教師パルマー（Giles B. Palmer）で、クーパーに代わって軍事訓練を担当していた（イギリス式からアメリカ式になる）<sup>(141)</sup>。顔恵慶はセント・ジョンズで教師をしていたときの軍事訓練の教官はヴァージニア軍事学院の卒業生であると述べているが、この教官こそパルマーであろう<sup>(142)</sup>。パルマーの厳しい姿勢は軍事訓練に対する表だった批判を封じ込めたにちがいない。1905年に入学した学生は卒業にあたってパルマーの軍事訓練を次のように振り返る。

軍事訓練が我々にとってもっともつらい時間であった。我々のような繊細な若者にとって、手袋もはめず長袍ロングガウンも着ずに寒さにさらされるなど、ほとんど耐えがたいことであった。とくにその年は寒さが厳しかった。パルマー少佐は我々に少しも哀れみを示さず、肋骨が折れる寸前まで胸を張らせた<sup>(143)</sup>。

1906年に入学した学生もほとんど同じ感想を残しており、いかに軍事訓練が彼らにとってつらい経験であったかがわかる。と同時に、このつらい経験をいささか誇らしげに語る彼らの口ぶりには、試練に耐え、それを克服した喜びと自信を見て取ることができる（彼らの卒業時にはパルマーはもういなかった）。

第一次世界大戦がはじまり、セント・ジョンズでふたたび軍事熱が高まった。外国人教師には従軍するものもいた。1916年には大隊の強化が図られた<sup>(144)</sup>。第一次世界大戦が終わり、ドイツのミリタリズムの破綻が明らかになると、中国では「軍国民」主義に対する批判が高まった。清末民国初期の「兵式体操」は「軍国民」主義と不可分だったからである。兵操の可否が議論され、1919年に長沙の雅礼学校、1920年秋には南京高等師範学校で兵操が廃止された<sup>(145)</sup>。セント・ジョンズもこの潮流と無縁でいることはできなかった。1920年1月に『セント・ジョンズ・エコー』に掲載されたある論文は、military preparedness と militarism を峻別し、平和の時代にあっても、将来ふたたび別のチュートン人勢力が勃興しないとも限らないから、戦争に備えておかねばならない、と主張していた<sup>(146)</sup>。しかし、その年の秋、セント・ジョンズの大隊は解散させられた<sup>(147)</sup>。ただし、ボーイス

カウトは存続を許され、陳炳章隊長、潘蕃生、T. C. Waung 副隊長のもと、30名が活動していた<sup>(148)</sup>。

ボーイスカウトはイギリスのベーデン＝パウエルが1908年に設立した青少年組織である。中国で最初のボーイスカウトは1912年に嚴家麟（嚴家齡）が武漢の文華書院で設立した「童子軍」とされる。上海ではミッション・スクールを中心にボーイスカウト活動がおこなわれていたが、中国人の参加は少なかった。1913年に華童公学校長のケンプ（G. S. Foster Kemp）が童子軍教育会議を開き、「中華童子軍」の名称を採用し、「中華童子軍総会」を設立した<sup>(149)</sup>。セント・ジョーンズでは1914年春にノートン（John Randall Norton）が中心となってボーイスカウトが組織され、青年会中学と合わせて中国童子軍第5隊として認められた<sup>(150)</sup>。1915年には華童公学、青年会中学、セント・ジョーンズ大学および中等部、滬江浸会大学などで童子軍が組織され、会員は約400名、会長は鍾文耀、副会長は薩鎮冰、聶其傑であった<sup>(151)</sup>。1915年5月に上海で開かれた極東大会が彼らの最初の晴れ舞台となり、童子軍は会場の秩序維持を担ったほか、西洋人の童子軍と合同で演習をおこない、築橋、歩射、テント設営、測量、応急処置などの技術を競った<sup>(152)</sup>。このときの名称「中華童子偵探隊」について『セント・ジョーンズ・エコー』に興味深い記事がある<sup>(153)</sup>。

中国の童子軍ではボーイスカウトのバイブルであるベーデン＝パウエル『スカウティング・フォー・ボーイズ』の誓いの言葉を採用していた（他の国のボーイスカウトも同様である）。その言葉は「A scout honours his King and Country」というものであったが<sup>(154)</sup>、ボーイスカウト運動の反対者がこれを誤解して、ボーイスカウトは清朝復辟を目指す組織であると誤って報告した。この出来事がいつかは特定できないが、文脈からいって、袁世凱の帝政、張勳の復辟などの事件が続いた1915年から1917年の間と考えられる。多くのボーイスカウトが親の反対で脱退を強いられ、スカウト活動も自粛を迫られた。そこでボーイスカウトの名称を「中華童子偵探隊」から「中華童子軍」に改めた。ボーイスカウトは名誉、忠誠、愛国心、服従など軍事的な美德を植えつけるが、ミリタリズムとは一線を画しており、少年たちを軍人や吸血鬼にするつもりはなく、反戦的（anti-war）である、とこの記事は訴える。

じつは1915年当時から名称については議論があり、「中華童子軍」をわざわざ「中華童子偵探隊」に変えたのは、軍事と関係ないことを強調するためであった。会長の鍾文耀は童子軍が政治や軍事とは関わりないこと、政治事業ではなくて社会事業であり、よき国民としての人格形成に役立つと主張していた<sup>(155)</sup>。しかし今度は scout の直訳である「偵探」という言葉が疑惑を呼ぶことになり、「童子軍」の名称を復活させたのである。この経緯

からわかるように、ミリタリズムと一線を画そうとした点にスカウト運動の特徴があった。そしてそれゆえに、軍事訓練が廃止されても生き延びることができたのである。

## 2 体育

いくらミリタリズムと一線を画していたとしても、ミッション・スクールで西洋人教師が主体的に軍事訓練をおこなっていたことは、現在の感覚では奇妙なことである。しかし西洋においても学校授業としての「体育」は新しい概念であり、その内実がいかなるべきかについて明確な合意はまだなかった。イギリスの学校で軍事訓練がおこなわれるようになったのは、ナポレオン戦争の頃まで遡ることができる。1870年の初等教育法制定以降、軍事訓練の導入が政府によって奨励され、1890年代まで軍事訓練は「体育」の一般的な内容であった。一方、パブリック・スクールではスポーツが盛んであった<sup>(156)</sup>。

アメリカでは学校授業としての「体育」は1860年にシンシナティでドイツ式体操が導入されたのを嚆矢に、主として中西部の都市部でドイツ式体操が広まったが、正課としてではなかった。1866年のカリフォルニア州法で初等、中等学校への「体育」導入が規定された（次は1892年のオハイオ州）。19世紀後半には体操教師養成のための師範学校も各地で設立されるようになる。一方、1862年のモリル法に基づいて設立された大学では軍事訓練が課された。ドイツ式体操、スウェーデン式体操（1880年代以降）はともに軍事的な目的とプログラムを含んでおり、軍事訓練との境界は明確ではなかった。1885年にアメリカ体育振興協会が結成され、主として体操中心の「体育」を推進し、軍事訓練や球技スポーツに反対したが、どのような方式の体操がよいかについて最終的な決定を下すことができなかった。20世紀に入ると競技スポーツが「体育」のなかの一要素として定着していく。その立役者はギューリック（Luther Halsey Gulick）とバンクロフト（Jesse Bancroft）であった。「新体育」の確立には、「play」の役割を重視し、授業は興味深いものでなければならないとするデューイ（John Dewey）らの教育論も大きな作用を果たした<sup>(157)</sup>。この新しい体育思想が中国でも受容され、兵操の可否をめぐる論争の着火点となったのである。

本稿で対象とする1920年までの時期、セント・ジョーンズには正課としての「体育」は存在しなかった<sup>(158)</sup>。しかし全学生は朝の体操と軍事訓練に参加することを義務づけられていた。以下、時系列にそって体操と軍事訓練の実施状況を見ていこう。

1890年代後半、全学生に課された訓練にはダンベルと執銃訓練が含まれていた。これらは最初任意であったが、やがて大学の正規のカリキュラムに導入された。学生は週2回訓練の指導を受け、ゲームやスポーツをして年2回の運動会に備えることが奨励された。

軍事訓練は規律、正確さ、組織を植えつけること、ダンベルはあらゆる筋肉を動かし均整のとれた身体にすること、インディアン・クラブは上半身の鍛錬をすることをそれぞれ目的とした<sup>(159)</sup>。訓練はクーパーが担当していたが、1898年にもう一人のクーパー（George W. Cooper）が着任すると、F・クーパーが軍事訓練、G・クーパーが体操を担当した<sup>(160)</sup>。

1900年代、学校は38エーカーの土地に8つの建物と2つの運動場と1つの体育館を有し、18名の教師と350名の学生が在籍していた。身体訓練には明確な体系はなく、体育指導者（Physical Director）も不在で、特定の教師が自発的に責務を担っていた。軍事訓練と徒手体操は強制で、テニス、サッカー、野球、陸上競技などのスポーツが娯楽としておこなわれた。徒手体操は日曜日を除く毎日午前7時15分から15分間、軍事訓練は月、水、金曜日におこなわれた。軍事訓練はアメリカ陸軍歩兵規則が適用され、命令に服従し上官に敬意を払うことが徹底された。隊長の命令の真似をしたある学生はただちに退校処分となった。不適当な理由でさぼると罰点がつけられ、罰点1点ごとに土曜日の午後に30分教室で座らされる。罰点が50点たまると留年しなければならない<sup>(161)</sup>。軍事訓練は服従、行動の迅速さ、勇気、男らしさを植えつけ、競技スポーツは競争心、大学精神を養うことができた<sup>(162)</sup>。軍事訓練を担当したのは1901年から1906年までパルマー、1907年以降はスタイガーがつとめた。スタイガーは上海の万国商団にも所属していた。

遅くとも1913年までに体育指導者のポストが新設され、スタイガーが就任していた。1913年にスタイガーが休暇で一時帰国すると、サンフォード（Edgar L. Sanford）が体育指導者となった。1917年、大学4年の楊錦輝が副体育指導者に任命され、サンフォードを助けることになった。1919年にサンフォードが休暇で一時帰国すると、大学を卒業したばかりの沈嗣良が中国人としてはじめて体育指導者に任命された（ボーイスカウトの隊長も兼任）。翌年、沈がアメリカへ留学すると Z. D. Wong が跡をついだ。

1916-1921年に在学した蘇公雋は冬の体操について、蘇州河岸のグラウンドは遮蔽物がないため北風にさらされ、ぶ厚い綿の服を着ることが禁じられていたので、学生は「虐政」とみなしていたという。1回さぼると罰点1点、2回連続でさぼると2点、3回連続で4点がつけられ、25点で停学の可能性があった。これには逃げ道があって、1日おきに出席すれば、一番寒い時期を25点以内で乗り切れた。軍事訓練は月、水、金曜日の午後4時におこなわれ、金曜日は検閲であった。すべてアメリカ式で、アメリカ人教員が指揮し、号令は英語で、まるでアメリカ軍部隊のようであったという<sup>(163)</sup>。

1910年代後半には健康管理が強化された。従来中等部と大学新入生（編入者）を対象とした医学検査がおこなわれてきたが、1918-1919年度から中等部と大学1年生全員を対象として医学検査と身体検査をおこなうことになった<sup>(164)</sup>。表4は医学検査の結果である。

以上のほか、鼠径腺肥大、鼻閉塞、扁桃腺肥大は非常に多いと報告されている。心臓に異常が認められた学生は数人が軍事訓練を免除され、全員が過激な運動を免除された。このなかには学校代表選手2人が含まれており、代表から外された。大学生に肺の異常が多いことが見て取れるが、うち1人は結核と診断されたのか、学校を止めて治療に専念することになった。馬約翰は中国人のだれもが脊柱弯曲症だと指摘していたが<sup>(165)</sup>、実際には1.9%にすぎない。

身体検査では身長、体重、胸囲などが測定され、身体の強壯度がピニエ指数（身長から最大吸気時の胸囲と体重を引いた数）で示された。ピニエ指数は低いほどよく、20-25が平常で30以上は非常に虚弱とされる。表5によると、ピニエ指数は非常に高い値を示している。つまり中国人学生の体質はきわめて虚弱であるということになる。ただサンフォードは西洋人の基準が必ずしも中国人に適用できるわけではないと留保をつけている。

中等部では前年から週2時間の強制運動が全学生に課せられた（北京の清華学校では

表4 1918-1919年度医学検査結果

|              | 大学1年（77名） | 中等部（240名） | 合計（317名） |
|--------------|-----------|-----------|----------|
| トラコーマ、まぶたの炎症 | 43.00%    | 25.40%    | 29.00%   |
| 耳垢           | 15.50%    | 35.45%    | 30.60%   |
| 菌の不良         | 32.50%    | 24.25%    | 26.20%   |
| 心臓           | 9.60%     | 8.35%     | 8.80%    |
| 肺            | 11.70%    | 1.35%     | 3.80%    |
| ヘルニア         | 0%        | 0.85%     | 0.60%    |
| 包茎           | 6.50%     | 10.00%    | 9.20%    |
| 脊柱弯曲症        | 3.90%     | 1.30%     | 1.90%    |
| 水虫           | 3.90%     | 12.90%    | 10.70%   |
| 予防接種が必要      | 62.30%    | 59.60%    | 60.20%   |

出典：SJE, November, 1918.

表5 年齢別ピニエ指数

| 年齢 | 体重（kg） | 身長（cm） | ピニエ指数 |
|----|--------|--------|-------|
| 16 | 47.0   | 163.0  | 43.9  |
| 17 | 49.1   | 164.7  | 41.2  |
| 18 | 50.6   | 164.3  | 37.8  |
| 19 | 50.6   | 165.6  | 39.1  |

出典：SJE, November, 1918.

表6 強制運動一覧

| 種 別        | 人数 |
|------------|----|
| クロスカントリー   | 54 |
| サッカー（選手以外） | 55 |
| サッカー（初心者）  | 8  |
| インディアン・クラブ | 31 |
| テニス        | 72 |
| 陸上競技       | 24 |
| ウォーキング     | 5  |

出典：SJE, March, 1920.

1913年に「強迫運動」制度が導入されていた<sup>(166)</sup>。無断欠席はほとんどなく、学生たちは隊に所属することがかっこいいと感じるようにまでなった。表6は運動の種類と所属する学生数を示したものである。

中等部でのこうした試みは大きな成果を生み、1919年末の測定では大幅に良い結果を示した。中等部の学生は自分で自分の身体を管理できないと考えられていたから<sup>(167)</sup>、体育指導者の熱意もまずこちらに傾けられた。しかし沈嗣良はこの試みを大学でも実施したいと考えており、それは沈の渡米後に実現された<sup>(168)</sup>。

### Ⅲ 国旗事件とスポーツの政治化

1919年5月、いわゆる五・四運動が勃発し、上海じゅうの学校を政治運動の渦に投げ込んだ。セント・ジョンズでも多少の波風は生じたが、概して平穏な学園生活が続いていた。厳格に規律を課す一方で、民主的な運営がおこなわれ、学生の不満がおさえられていたからである。これは巧妙な支配であった。1922年の非キリスト教運動もセント・ジョンズにはさしたる影響を及ぼさなかった。1922年にセント・ジョンズ大学のある学生は「我々は運動競技にとっても興味をもっている。というのも我々は、少年はよく学びよく遊べというローズヴェルトのアドバイスの健全さを十分理解しているからだ」と記している<sup>(169)</sup>。セント・ジョンズの外の世界と違い、この学生はスポーツを正当化するのに「軍国民」主義も民主主義も必要としていない。こうした楽天的なスポーツ観は、やがて修正を迫られる。

1925年5月30日に起こった五・三〇事件は上海の学校をふたたび政治運動の渦に投げ込んだ。セント・ジョンズでは従来の学生自治会にかわって、急進的な学生会が成立し、

学校当局に休校を迫った。紆余曲折のすえ、学校側は休校に同意した。6月2日夜、ボーイスカウト副隊長潘志傑がポット校長に中国国旗の半旗を掲げるよう要求した。ポットははっきりした返事をしなかったが、潘は黙認のサインだと理解した。翌日中国国旗が半旗に掲げられた。これを見た上海教区司教グレイヴズ（Frederick Rogers Graves）はポットに旗を降ろすよう要求、ポットは用務員に国旗を降ろさせた。ポットは常になく厳しい姿勢で学生に臨み、学校の閉鎖を決定した。学生側は永遠に戻らないと誓って学校から出て行った。大学の約6割、中等部のはほぼ全員、あわせて553名が学校を離れ、新たに光華大学を設立した。

楊禾豊によれば、従来「国旗事件」は文化侵略に対する反帝国主義運動であり、退学を迫られた学生は革命の英雄であるかのように語られてきた。しかし事實はそうではなく、ポットと学生との対立が、五・三〇時期の政治状況のなかで革命の言説に回収されていったというのが真相のようである。学生側は自らの立場を正当化するために事実を故意にねじ曲げ、ポットが中国の国旗を破り中国を侮辱したと主張した。学校側は弁解をしたが、反帝国主義の気運が高まっているなかで、セント・ジョンズは格好の標的となっていた<sup>(170)</sup>。

同年9月、光華大学が開学した。南洋でも新学期がはじまり、全学生による票決でセント・ジョンズの華東八大学体育連合会会員資格取消しを要求することが決定、残る六大学に意見を徴集したところ、みなこれに賛成したので、10月2日に同連合会へ正式に申し入れをおこなった。南洋の姿勢は強硬で、もし認められなければ自ら脱退すると威嚇した<sup>(171)</sup>。

当時の体育会連合会会長はセント・ジョンズの沈嗣良であった。沈はこの提案を受けて、10月5日、四川路の青年会会館で臨時の会議を開催した。会議には各大学から職員と学生の代表が参加、司会は本来沈が務めるべきだが当事者なので辞退し、副会長の張信孚（金陵大学）が務めた。南洋の提案が朗読された後、各自が意見を述べあった。東呉大学の代表は、会員資格の停止は会の規則を破壊するかスポーツの原則に違反した場合になされるべきであると主張し、金陵大学の代表はスポーツに政治を持ち込んではならないと述べた。東南大学の代表は1年間の活動自粛という処分を提案した。学生は南洋に賛成するものが多かった。セント・ジョンズ代表は運動部の意見書を配布、体育と政治を区別すべきで、会員資格停止の処分は不当だと主張した。金陵代表は事の重大さに鑑み、一度帰校して全体の意見を得てから票決すべきだと提案、その結果、決定は1週間延期された<sup>(172)</sup>。

1週間後、華東八大学体育連合会書記のナッシュ（Willard L. Nash）は投票の結果、賛成6票、反対8票で南洋の提案は否決されたと発表した<sup>(173)</sup>。10月14日、南洋は華東八大学体育連合会からの脱退を宣言した。宣言書は次のように言う。五・三〇事件でセント・

ジョーンズの学生が良心に駆られて救国に立ち上がったのに、学校当局は彼らを圧迫し、国旗に侮辱を加えた。人道護持を称する外国人の化けの皮がすっかり剥がれた。列強の「順民養成所」である教会学校が断固として反抗したのは今回がはじめてである。華東八大学体育連合会は体育の機関であり政治外交問題を持ち込んではいならないという意見があったそうだが、体育や知育は人格の基礎の上に建設されるべきで、スポーツの規則はみな道德、人格をその基礎としている。人格なくして体育はない。セント・ジョーンズの外国人教師はわが国の国旗を侮辱し、青年の愛国運動を圧迫した。これは国体、人格に対するこの上ない恥辱である。南洋の提案は体育会の組織を破壊するために出されたと言うものがあるが、外国人の指図の下で民族精神を喪失し、それでうまくいくだろうか<sup>(174)</sup>。

10月16日、南洋の呼びかけに応え、復旦大学が脱退を宣言した。一方、セント・ジョーンズも1年間の活動自粛を申し出ていた。反対校との対戦で不測の事態が起きかねないというのが表向きの理由であった<sup>(175)</sup>。

1926年3月13日、南洋、復旦大学、光華大学の代表が集り、江南大学体育協会（Kiangnan Intercollegiate Athletic Association）の設立を決定し、17日からバスケットボールの選手権大会を開催した。協会の会長には復旦大学の郭任遠、副会長には光華大学の容啓兆が選ばれ、4月の執行委員会でさっそく持志大学と中国公学の加入が認められた<sup>(176)</sup>。のち暨南大学、大夏大学、中央大学、金陵大学が参加し、地区最大の体育組織に成長する。一方、華東大学体育協会は実質的活動を停止し、1929年に解散した<sup>(177)</sup>。こうして上海スポーツ界を牽引してきたセント・ジョーンズはその活躍の舞台を失った。

五・三〇運動を契機とする上海スポーツ界の再編は、より大きな潮流の一コマであった。1923年、大阪で開かれた第6回極東大会の開会式で、中国 YMCA 体育主事グレイ（John H. Gray）が中国代表として挨拶することになっていた。それを聞きつけた在日華僑がこれを問題視し、中国人の代表を押し立てた。この事件が契機となり、スポーツ界での主権奪還闘争がはじまった。1924年、グレイが中心となって準備していた全国運動会に対して反対運動が起こり、中国人に運営が委ねられた。1924年7月、YMCA 主導の中華業余運動連合会（1922年設立）に代わる組織として、中国人主体の中華全国体育協進会が成立した。非キリスト教運動、教育権回収運動、そして五・三〇運動などナショナリズムの高まりがこうした動きの背景にあった<sup>(178)</sup>。もはやスポーツと政治を区別するという主張は受け入れられないものになっていた。南洋の愛国的主張の是非を英語で議論するという光景は、もはや茶番劇でしかなかった。

## お わ り に

なぜセント・ジョンズが中国で最初の運動会を举行し、黎明期のスポーツ界で主導的な役割を果たすことができたのか。有山輝雄は日本の高等教育機関で野球が普及したことについて、「遊戯が成立するためには、日常性から隔離され、それだけで完結した時間と空間が必要なのである。明治の社会において、そうした人工的な遊戯世界を成立させるいわば特権的な時間と空間を提供できたのが、大学予備門、第一高等中学校などの高等教育機関だったのである」と説明した<sup>(179)</sup>。このような場を中国に求めるならば、それはミッション・スクールしかありえない。セント・ジョンズは行政的にも、地理的にも、言語的にも、一般の中国社会から遊離した存在であった。だからこそ、スポーツという中国人にとってまったく未知の身体文化を移植することができた。

ではなぜミッション・スクールのなかでもセント・ジョンズだったのか。その理由は、前稿で指摘したように、セント・ジョンズがキリスト教化よりも西洋化を優先し、いち早く英語教育を導入したことに見いだされる。スポーツは学園の西洋化の一環であり、学校側が積極的に導入した<sup>(180)</sup>。この点、日本の学校スポーツが自治的に発達したのとは対照的である。

このようにして導入されたスポーツが大きく発展したのは、いくつかの理由がある。スポーツの導入と時を同じくして、英語学習を促進するために英文の校内雑誌『セント・ジョンズ・エコー』が創刊された。スポーツとメディアの関係はいまさら言うまでもなからう。また、学校は施設や用具を提供し、積極的にスポーツを奨励した。スタッフには優れた指導者もいた。さらに他の学校にさがけて設立された校友会もさまざまな形でスポーツの発展を支えた<sup>(181)</sup>。スポーツは在校生と卒業生を結ぶ絆となり、愛校心を高めた。南洋というライバルの存在も大きい。ケンブリッジとオクスフォード、ハーバードとイエール、早稲田と慶応などの対抗戦がスポーツを大きく発展させたことを考えれば、その重要性が理解できるだろう。

このように恵まれた条件のもとで、セント・ジョンズのスポーツは発展していった。当初の運動会は校内の空き地でおこなわれるお祭りにすぎなかったが、正規化、競技化の道を歩み、やがて極東大会に接続していった。もっとも人気のあったスポーツはテニスとサッカーであった。見るスポーツとしては、サッカーが圧倒的な人気を誇った。アメリカ人教師のたび重なる努力にもかかわらず、野球は根づかなかった。セント・ジョンズの学生は、主体的にスポーツを選択したのである。それは学園の外の状況にも左右された。野球は適当な対戦相手がいなかったからである。

スポーツは中国社会から遊離した空間で受容され、繁栄した。スポーツを中国化する努力はあまり払われなかった。日本ではスポーツマンシップが武士道に変えられたが、中国ではスポーツマンシップの訳語すら定着しなかった。スポーツ界では外国人が主導権を握り、英語が公用語であった。セント・ジョーンズのスポーツは学校そのものと同じように、ますます「貴族」化していった。「よく学びよく遊べ」、このような特権を享受できるのは、中国人のなかでもほんの一握りにすぎない。1920年代のナショナリズムの高揚に直面して、セント・ジョーンズがスケープゴートとなったのは決して偶然ではない。セント・ジョーンズはあまりにも中国社会から浮き上がっていたのだ。

とはいえ、『セント・ジョーンズ・エコー』はセント・ジョーンズの一面しか代表していないことも事実である。同紙の編集方針に大きな影響を行使し続けたポット校長は、ナショナリズムに対して危機感を持っていた。その結果、『セント・ジョーンズ・エコー』では過激なナショナリズムが主張されることはなかった。東亜同文書院との野球戦で、セント・ジョーンズ側の記録はきわめて抑制されたものになっているが、東亜同文書院側の記録と照らし合わせると、彼らが強い民族意識を持っていた可能性がある。そもそも1925年に学生の大半が学園を去ったのも、けっして突発的な出来事ではなかった。国旗事件は、これまで蓄積されてきた矛盾が一気に噴出したものと解釈すべきであろう。それは起こるべくして起こったのだ。

セント・ジョーンズのスポーツは、どこまで中国のスポーツを代表しうるのだろうか。それを見定めるには、中国の他の地域、他の学校、女性や学生以外のスポーツなどとの比較を通じて、セント・ジョーンズの経験を相対化する必要がある。さらにそのうえで、日本やフィリピンなどと比較し、中国の経験が持つ意義を明らかにすることが必要となる。それはたんにスポーツ史の問題に止まらず、中国の近代史にもいささかの貢献をなしうるのではないかと考えている。今後の課題としたい。

## 註

- (1) 王道傑、周明星、張曉義「1890年聖約翰書院運動会史考」『体育文化導刊』第103期、2011年1月は、1980年から2009年の研究で論及された運動会の記事を比較検討して運動会の実態に迫ろうとしたものである。しかし結局のところ「聖約翰大学自編校史稿」（後述）に行きつくものであり（著者らはこの文献にすら当たっていない）、無益な作業だと言わざるをえない。セント・ジョーンズのスポーツ全般を紹介した文章として、黎宝駿「聖約翰大学体育史略」中国人民政治協商會議上海市委員会文史資料委員会、上海市体育運動委員会文史資料委員会編『体壇先鋒』（上海文史資料選輯第65輯）上海人民出版社、1990年がある。黎は1920年代半ばにセント・ジョーンズに在籍し（1927年卒業）、バスケットボール部主将をつとめ、第6回から3回連続で極東選手権競技大会に出場した。黎の文章は自らの経験を踏

- まえ、信頼に足るものであるが、1910年代以前の状況については不正確な点が多い。
- (2) 高嶋航「『東亜病夫』とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年。
- (3) Wen-Hsin Yeh, *The Alienated Academy: Culture and Politics in Republican China, 1919-1937*, Harvard University Press, 1990, p. 66.
- (4) “Athletic Sports,” *St. John’s Echo*, July 20, 1891. *St. John’s Echo* は以下の注では *SJE* と略記する。
- (5) “Athletic Sports,” *SJE*, July 20, 1891.
- (6) “Athletic Sports,” *SJE*, December 20, 1893.
- (7) Mong-en Tsu, “Athletic Sports,” *SJE*, December 20, 1895. 上海体育志編纂委員会編『上海体育志』上海社会科学院出版社、1996年、155頁に辮髪の学生がハードル走をしている写真があり、「1890年聖約翰大学運動会跨欄比賽」というキャプションがついているが誤りである。同じ写真は上海図書館編『老上海風情録：体壇回眸卷』上海文化出版社、1998年、49頁に「清末上海聖約翰大学学生在上体育課時進行跨欄比賽」、郎淨『近代体育在上海（1840-1937）』上海社会科学院出版社、2006年、56頁に「1890年聖約翰大学運動会跨欄比賽」というキャプションで掲載されている。なお『上海体育志』162頁には辮髪の学生が走高跳をしている写真があり、「1890年聖約翰大学運動会跳高比賽」というキャプションがついているがおそらく誤りであろう。この写真も体育関係の書籍にしばしば転載されている。一般に、こうした写真には典拠が示されず、キャプションもいいかげんなものが多いので注意が必要である。
- (8) “Athletic Sports,” *SJE*, February 20, 1900.「記録への固執」はスポーツの近代化の重要な指標である。アレン・グッドマン著、谷川稔、石井昌幸、池田恵子、石井芳枝訳『スポーツと帝国：近代スポーツと文化帝国主義』昭和堂、1997年、4頁。
- (9) 刁は10歳までを中国で過ごし、その後ハワイに渡った。清華大学教授、外交部参事などを務めた刁作謙は弟で、彼もセント・ジョンズに学び（1903年卒）、第5回（1921年）と第6回（1923年）の極東大会にテニスの中国代表として参加した。
- (10) Mary Lamberton, *St. John’s University Shanghai 1879-1951*, United Board for Christian Colleges in China, 1955, p. 162. 孫文が学んだ学校としても知られるオアフ・カレッジ（現プナホウ・スクール）では1887年までに陸上競技が導入されていた。もっとも早い運動会の記録は1890年11月のものである。Dan Cisco, *Hawai’i Sports: History, Facts, & Statistics*, University of Hawai’i Press, 1998, p. 346.
- (11) 福開森〔Ferguson〕「南洋公学早期歴史」交通大学校史撰写組編『交通大学校史資料選編』第1巻、西安交通大学出版社、1986年、13頁。前掲上海図書館編『老上海風情録：体壇回眸卷』46頁、王華偉『中国近現代体育課程史論』高等教育出版社、2004年、36頁に「上海南洋公学1899年举行的第一届校運會」というキャプションのついた写真が掲載されているが、背景の上院大樓は1900年春に竣工しており、1899年のものでないことは明らかである。
- (12) “Athletic Sports,” *SJE*, February 20, 1902.
- (13) “The Spring Sports,” *SJE*, August, 1903; Wu Chih-kang, “The Influence of the YMCA on the Development of Physical Education in China,” dissertation, University of Michigan, 1956. Wu Chih-kang は、最初にストップウォッチが使用されたのは1908年に天津で開催された第6回連合運動会であったとする。

- (14) “Athletic Sports,” *SJE*, December 20, 1903.
- (15) “Field Day,” *SJE*, August 20, 1904.
- (16) Andrew Y. Y. Tsu [朱友漁], *Friend of Fishermen*, Trinity Press, 1951, p. 13. *SJE* によると、朱は1904年秋、1905年春の校内運動会で最多得点を記録し、優勝者となった。
- (17) 1909年に彼の名を冠した思孟堂 (Mann Hall) がセント・ジョーンズの敷地に建てられた。
- (18) John Mo [馬約翰], “My Fourteen Years Experience of Western Physical Education,” report submitted to International YMCA College, 1920, p. 12.
- (19) A Member of the Cliosophic Club, “The Preparatory Field and Track Meet,” *SJE*, December, 1912; “St. John’s in the Local Chinese Amateur Athletic Meeting,” *SJE*, June, 1913. 陳鶴琴の回憶によれば、バートンはラテン語を教えていたが、非常にこわい先生だったようである。前掲上海聖約翰大学校史編輯委員会組編、徐以驊主編『上海聖約翰大学 (1879-1952)』208頁。
- (20) 前掲黎宝駿「聖約翰大学体育史略」、 “New Athletic Record Board,” *SJE*, January, 1913.
- (21) “Athletic Activities,” *SJE*, February, 1907.
- (22) “National Athletic Meet at Nanking,” *SJE*, December, 1910. この大会については Andrew Morris, “‘To Make the Four Hundred Million Move’: The Late Qing Dynasty Origins of Modern Chinese Sport and Physical Culture,” *Comparative Studies in Society and History*, Vol. 42, No. 4, October, 2000 が詳しい。また高嶋航「極東選手権競技大会とYMCA」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』京都大学学術出版会、2007年でもYMCAの視点からこの大会の意義を論じた。
- (23) Wei Hwen Tsang [韋煥章], “China in the First Far Eastern Olympic Games,” *SJE*, February, 1913.
- (24) T. K. Sung [沈志高], “A Letter from the Relay Team of the American Company, S. V. C.,” *SJE*, June, 1914; K. B. Young [楊錦輝], “The Kiangwan Open Meet,” *SJE*, June, 1914.
- (25) Kenneth B. Young [楊錦輝], “Intercollegiate Meet,” *SJE*, June, 1915.
- (26) 初期の極東大会の中国代表選手については信頼すべき名簿が存在しない。『進歩雑誌』第8巻第3号、1915年6月の名簿は英語表記が主で、すべての選手の漢字名を特定できるわけではない。またこの名簿に掲載された選手が実際に競技に出場したかどうかは定かではない。
- (27) 林語堂「八十自述」『林語堂名著全集』第10巻、東北師範大学出版社、1994年、270頁。
- (28) 「遠東運動会余談」『時事新報』1915年5月25日。
- (29) David W. K. Eu [欧偉国], “The East China Intercollegiate Meet,” *SJE*, May, 1917.
- (30) Z. P. Daung [唐樹屏], “Field and Track,” *SJE*, June, 1920.
- (31) もっとも、すべての種目でこのことが当てはまるわけではない。たとえば投擲系の種目は記録が年々向上している。
- (32) Thomas E. LaFargue, *China’s First Hundred: Educational Mission Students in the United States, 1872-1881*, Washington State University Press, 1987, pp. 53-54, 124.
- (33) Hui-ch’ing Yen [顏惠慶], *East-West Kaleidoscope, 1877-1946: An Autobiography*, St. John’s University Press, 1974, p. 7.
- (34) 陳湿明、梁友徳、杜克和『中国棒球運動史』武漢出版社、1990年、8頁、陳湿明「棒球運動在中国的興起与早期發展」『成都体育学院学報』第17巻第2期、1991年、崔楽泉『中国近代体育史話』中華書局、1998年、227頁など。いずれも典拠を示していない。

- (35) “Baseball,” *SJE*, July 20, 1891.
- (36) Hui-ch’ing Yen, *op. cit.*, p. 8
- (37) “Base-ball Match,” *SJE*, August 20, 1903.
- (38) 「本書院対 St. John’s College 野球試合」東亜同文書院学友会『会報』第1号、1904年8月。
- (39) 鈴木康史「第一高等学校における「壮」的なもの」中村敏雄編『日本人とスポーツの相性』創文企画、2002年。
- (40) N. L. Nien, “Base-ball Matches,” *SJE*, June 20, 1904; “Baseball Matches,” *SJE*, August 20, 1904.
- (41) “Baseball Matches,” *SJE*, August, 1905; “A Baseball Match,” *SJE*, August, 1906.
- (42) 東亜同文書院学友会『会報』第4号、1906年4月、“Base Ball Game,” *SJE*, December, 1906.
- (43) “The Queue,” *SJE*, January, 1911; “Base-ball Game,” *SJE*, October, 1911; “Students Cutting Their Queues,” *SJE*, December, 1911. 南洋では1911年11月9日に唐文治校長の提唱により運動場で「剪髮大会」を開き、全教職員と全学生が断髪した。上海交通大学校史編纂委員会編『上海交通大学紀事：1896-2005』上巻、上海交通大学出版社、2006年、70頁。
- (44) “St. John’s vs. Shanghai,” *SJE*, October, 1911. スタイガーはのち東洋史の教授となり、*China and the Occident: The Origin and the Development of the Boxer Movement*, Yale University Press, 1927（邦訳は藤岡喜久男訳『義和団：中国とヨーロッパ』桃源社、1967年）を著した。
- (45) “Baseball,” *SJE*, November, 1915.
- (46) F. L. H. P. [Francis L. H. Pott], “Editorial,” *SJE*, January, 1915.
- (47) アメリカの植民地フィリピンでは、野球は導入当初は盛んであったが1920年代に人気を失った。一方、日本や日本の植民地であった台湾、朝鮮では野球が盛んであった。現在、台湾、韓国では野球が盛んだが、北朝鮮ではあまり盛んではない。スポーツの伝播／受容、盛衰には様々な要因がからんでいる。
- (48) 前掲崔楽泉『中国近代体育史話』223頁。羅時銘、趙譚華主編『中国体育通史』第4巻、人民体育出版社、2008年、359頁もまったく同様の記述である。いずれも典拠は示されていない。
- (49) Untitled document, *SJE*, July 20, 1892.
- (50) “Tennis Tournaments,” *SJE*, August, 1909; Z. P. Daung, “Athletic News,” *SJE*, November, 1919.
- (51) K. C. Tsar, “Tennis Tournaments,” *SJE*, August, 1908.
- (52) John Mo, *op. cit.*, p. 13.
- (53) “Auction of Tennis Rackets,” *SJE*, May, 1913; Z. Y. Ling, “Tennis,” *SJE*, May, 1919.
- (54) “Tennis Tournament,” *SJE*, December 20, 1898.
- (55) Z. Z. Kwei [帰潤庠], “The Inter-collegiate Tennis Tournament,” *SJE*, August, 1907.
- (56) Yang Zung-sung [楊潤生], “National Athletic Meet at Nanking,” *SJE*, December, 1910.
- (57) 前掲崔楽泉『中国近代体育史話』209頁、前掲羅時銘、趙譚華主編『中国体育通史』第4巻、346頁。両書とも華北については1900年以前に協和書院でサッカーがおこなわれていたとするが、これも確証はない。
- (58) “School Notes,” *Yellow Dragon*, Vol. 1, No. 8, April, 1900.
- (59) このクラブは1908年に南華足球会となり、なん度かの離合を経て1920年に南華体育会

と改称、現在に至る。

- (60) “News Column,” *SJE*, February 20, 1896.
- (61) 沈文彬主編『中国的足球搖籃：上海足球運動半世紀』上海文化出版社、1995年、4頁。
- (62) “Athletic Associations,” *SJE*, August 20, 1898; “Foot-ball Matches,” *SJE*, February 20, 1902.
- (63) “Foot-ball Matches,” *SJE*, February 20, 1902.
- (64) 交通大学校史編写組編『交通大学校史』上海教育出版社、1986年、104頁。
- (65) 前掲上海交通大学校史編纂委員会編『上海交通大学紀事』上巻、43頁。
- (66) “Foot Ball,” *SJE*, February 20, 1904.
- (67) Chiang Monlin [蔣夢麟], *Tides from the West*, China Culture Publishing Foundation, 1957, p. 61.
- (68) この点、異常なまでに練習をし、またそれを評価する、ストイックな日本の学生スポーツ界と大きく違う点である。
- (69) John Mo, *op. cit.*, pp. 2-3.
- (70) *Ibid.*, p. 13. W. B. Nance, *Soochow University*, United Board for Christian Colleges in China, 1956, p. 39にも同様の話が記される。
- (71) K. T. Tsoong, “Football Matches,” *SJE*, January, 1915; “Football,” *SJE*, January, 1918.
- (72) John Mo, *op. cit.*, p. 21.
- (73) 蘇公隽「我所了解的聖約翰大学」『縱横』第83期、1996年11月。
- (74) C. H. Tau [刁慶欽], “Football,” *SJE*, December, 1920. 刁慶欽は1923年の第6回極東大会にバスケットボールの選手として出場した。
- (75) 李輔材、文福祥、董爾智、申恩祿、鍾添發『中国籃球運動史』武漢出版社、1991年、8-9頁。
- (76) Max J. Exner, *Report*, 1908-1909; *Report*, 1913-1914. 本稿で扱う *Report* とは北米 YMCA の外国主事が毎年年度末の9月末日にニューヨークの国際委員会にあてて作製した年次報告書であり、現在ミネソタ大学に所蔵されている。以下、単に *Report* と記す。
- (77) 前掲李輔材等『中国籃球運動史』12頁。
- (78) T. W. Sung, “Basket Ball,” *SJE*, May, 1912.
- (79) “Basket-ball,” *SJE*, March, 1916.
- (80) V. K. Yang [楊文愷], “Basket-ball,” *SJE*, April, 1916.
- (81) V. K. Yang, “Basket Ball Matches,” *SJE*, March, 1917.
- (82) “Basketball,” *SJE*, January, 1920.
- (83) “Athletic Club,” *SJE*, October 20, 1896.
- (84) “Bicycle Ride across the Country,” *SJE*, February 20, 1900.
- (85) “New Tennis Courts,” *SJE*, June, 1913.
- (86) “Volley Ball,” *SJE*, December, 1915.
- (87) “Hand-ball,” *SJE*, March, 1916.
- (88) S. C. Kuo [郭先桂], “Roller-skating,” *SJE*, January, 1913.
- (89) K. T. Tsoong, “Rowing,” *SJE*, December, 1914.
- (90) “St. John’s Boxing Club,” *SJE*, November, 1919.
- (91) John Mo, *op. cit.*, p. 3.
- (92) “Athletic Club,” *SJE*, October 20, 1896.

- (93) F. K. Woo, "Athletic Association," *SJE*, April 20, 1900. テニスしかないものは年会費が70セントで済むようになった。テニスの人気がうかがえよう。
- (94) H. T. Wei [韋憲章], "Athletic Notes," *SJE*, October, 1913; C. F. Remer, "Editorial," *SJE*, December, 1920. 同年にテニス用具が自弁となったことも、運営体制の変更と関係があるのだろう。
- (95) Tsoong khau-thauh, "New Officers," *SJE*, April, 1914; "Constitution of St. John's University Athletic Association," *SJE*, April, 1914.
- (96) 第一次世界大戦の勃発により、極東大会は1915年春に延期となった。Kenneth B. Young, "The Postponement of the Olympics," *SJE*, October, 1914.
- (97) F. L. H. P., "Editorial," *SJE*, April, 1914.
- (98) A Member of the Clisophic Club, "Autumn Home Sports, 1912," *SJE*, December, 1912.
- (99) その中心人物の一人がウィリアム・ポットであった。W. K. Eu, "The General Athletic Association," *SJE*, October, 1917; Z. P. Daung, "The General Athletic Association," *SJE*, October, 1919.
- (100) アメリカ人はフィリピンでもスポーツによって民主主義に必要な資質を涵養しようとした。前掲高嶋「極東選手権競技大会とYMCA」。
- (101) "Officers and Executive Committee of S. J. A. A.," *SJE*, October, 1915.
- (102) Zung Tsoong Iung [唐增輝], "Chang in A. A. Constitution," *SJE*, September, 1920; C. H. Tyau, "New Officers of the Athletic Association," *SJE*, October, 1920.
- (103) 1918年におこなわれた学生48人の日常経費の調査によると、学費を含めた年間支出は480.36ドル(1914年)と458.82ドル(1917年)で体育関係の支出は平均8.42ドル、もっとも多いものは20ドルを費やしている。C. F. Remer, "The Cost of Living at St. John's," *SJE*, June, 1918. 前掲熊月之、周武主編『聖約翰大学史』63頁には1909年から1938年までのうち7年分についての学費一覧が掲載されている。「運動会費」は1909、1911年が2元、1917-1919年が4元、「体操服装費」は1909年が25元、1911年が20元、1916-1919年が16元となっている。
- (104) "Athletes Excused from Morning Drill," *SJE*, November, 1912; 前掲蘇公隽「我所了解的聖約翰大学」。
- (105) C. F. R. [C. F. Remer], "Editorial," *SJE*, December, 1920.
- (106) Tsung Ths-chien, "The Financial Report of St. John's University Athletic Association, September 6th, 1919 // February 6th, 1920," *SJE*, March, 1920.
- (107) N. L. Nien, "Formation of the Intercollegiate Athletic Association," *SJE*, June 20, 1904. "Athletics at St. John's College," *SJE*, February 20, 1905はこの会議が開かれた日を4月3日とする。
- (108) "Intercollegiate Athletic Association," *SJE*, August 20, 1904.
- (109) W. B. Nance, *op. cit.*, pp. 37-38.
- (110) 羅時銘『奧運来到中国』清华大学出版社、2005年、12-22頁。
- (111) 薛文婷『中国近代体育新聞伝播史論(1840-1949)』北京体育大学出版社、2010年、67-71頁。薛は1907年説の典拠を全国体育学院教材委員会審定『奥林匹克運動』人民体育出版社、2002年に求めるが、もっとも早くこの事実を指摘したのはWu Chih-kang, *op. cit.* で、典拠は天津YMCAの機関誌 *Tientsin Young Men*, VII, 12, May 23, 1908である。

- (112) 馮玉竜『『大公報』与近代中国体育研究』、修士論文、蘇州大学、2006年3月。薛文婷は『大公報』と『時報』を見たが、そのような記事は見つからなかったという。薛文婷『中国近代体育新聞傳播史論 (1840-1949)』69頁。筆者も1904年の『大公報』を繰ってみたが、探し出せなかった。
- (113) “Athletics at St. John’s College,” *SJE*, February 20, 1905.
- (114) 前掲上海交通大学校史編纂委員会編『上海交通大学紀事』上巻、45頁は「中華大学連合運動会」の最初の大会が1904年4月に蘇州でおこなわれたとするが誤りである。
- (115) Y. Y. Tsu [朱友漁], “Intercollegiate Field and Track Meet,” *SJE*, December, 1905; “Intercollegiate Sports,” *SJE*, February, 1907; “Intercollegiate Field and Track Meet,” *SJE*, August 1908; “Intercollegiate Sports,” *SJE*, August, 1909.
- (116) Z. Z. Kwei, “The Inter-collegiate Tennis Tournament,” *SJE*, August, 1907.
- (117) Alfred H. Swan. *Report*, 1913-1914.
- (118) Alfred H. Swan, *Report*, 1913-1914; Ho, Gunsun [郝更生], *Physical Education in China*, Shanghai: The Commercial Press, 1926, pp. 177-185.
- (119) ただし大学以外のスポーツや全国レベルのスポーツではなおYMCAが強い影響力を持っていた。
- (120) 前掲黎宝駿「聖約翰大学体育史略」。
- (121) “New Residence and the Gymnasium,” *SJE*, December 20, 1898; “Gymnasium,” *SJE*, February 20, 1899; “The Gymnasium,” *SJE*, April 20, 1899. 黎は1897年に後操場の北側に簡単な体育室が作られたとするが誤りである。
- (122) “The New Play Ground,” *SJE*, June 20, 1902. 黎が1900年に梵皇渡口に土地を借りてサッカー場をつくったとするのがこれに当たる。前掲黎宝駿「聖約翰大学体育史略」。
- (123) “The New Ground,” *SJE*, May 1907. 黎は1909年に校友会が寄贈した1万円で蘇州河北面に84畝の土地を購入し、正規のサッカー場を設置、その周囲にはトラックを巡らしたという。前掲黎宝駿「聖約翰大学体育史略」。
- (124) “New Land Acquired,” *SJE*, April, 1911; “New Tennis Courts,” *SJE*, June, 1913; Mary Lamberton, *op. cit.*, p. 71. この件に関しては、テニスコートへの言及がない以外、黎の記述は概ね *SJE* に一致する。前掲黎宝駿「聖約翰大学体育史略」。
- (125) “Athletic Improvements,” *SJE*, September, 1915; “New Tennis Ground,” *SJE*, May, 1916; “New Handball Courts,” *SJE*, June, 1916.
- (126) 前掲熊月之、周武主編『聖約翰大学史』270頁。
- (127) 前掲上海聖約翰大学校史編輯委員会組編、徐以驊主編『上海聖約翰大学 (1879-1952)』261頁には「聖約翰書院的学生接受兵式体操訓練 (1893年)」というキャプションの写真が掲載されている。これは前頁の孫摩西 (1949年卒)「文体活動与校園文化」に見える「1893年に学校に学生軍が成立した」という記事に合わせてつけたものだろうが、後述するように1895年にクーパーが軍事訓練をはじめる前は竹の棒、ばれきり、石油缶という出で立ちであったことを考えるならば、この写真は明らかにもっと後のものである。同じ写真は前掲上海図書館編『老上海風情録：体壇回眸卷』61頁に「十九世紀末期、上海聖約翰書院的学生接受兵式体操訓練」、高翠編著『從“東亞病夫”到体育強国』四川人民出版社、2003年、35頁に「上海聖約翰書院的学生接受兵式体操訓練」、前掲王華偉『中国近現代体育課程史論』39頁に「洋務運動時期接受兵操訓練的学生」というキャプションで掲載されている。なお

- 前掲上海図書館編『老上海風情録：体壇回眸卷』61頁には「洋務運動時期、身穿清兵服飾の上海聖約翰書院學生們在進行兵式操練（撮於十九世紀八十年代）」という写真もあるが、これも信じがたい。
- (128) “Drill,” *SJE*, April 20, 1895. ここにいう「義勇兵」は Shanghai Volunteer Corps のことであろう。クーパーは1886年に来華し、Volunteer に所属、一時は B 中隊の軍曹を務めた。Mary Lamberton, *op. cit.*, p. 38.
- (129) “Welcome,” *SJE*, April 20, 1895.
- (130) Y. Z. Tseu [周日庠], “The First Battalion Day,” *SJE*, November, 1915.
- (131) I. C. Suez, “The Alumni Register,” *SJE*, February, 1910; “Athletic Contests,” *SJE*, December 20, 1896.
- (132) “The Life of a Soldier,” *SJE*, April 20, 1895.
- (133) F. L. H. P., “Editorial,” *SJE*, August 20, 1895.
- (134) “Drill,” *SJE*, August 20, 1895.
- (135) “St. John’s College Volunteer Corps,” *SJE*, December 20, 1895.
- (136) “The Closing Exercises,” *SJE*, April 20, 1897.
- (137) “The Recruits,” *SJE*, April 20, 1897.
- (138) F. C. Cooper, “Physical Training,” *Records of the Triennial Meeting of the Educational Association of China*, vol. 3, 1899.
- (139) A. S. Yuan [袁杏生], “The Value of Military Drill in a School,” *SJE*, June 20, 1898.
- (140) Yau Kya-yi [姚家彝], “The History of the Class of 1910,” *SJE*, August, 1910.
- (141) “Change in the Drill,” *SJE*, April 20, 1901.
- (142) Hui-ch’ing Yen, *op. cit.*, p. 32.
- (143) L. Y. Chiu [邱良榮], “History of Class, 1912,” *SJE*, October, 1912.
- (144) V. K. Yang, “Old Rule Restored,” *SJE*, May, 1916.
- (145) いずれの学校も YMCA と関係が深い。雅礼学校 (Yali Middle School) は全校学生 170 名のうち 41 名が YMCA 会員であった。「学生青年会調査表 (1916 年度)」『青年進歩』第 10 冊、1918 年 2 月。南京高等師範学校では元 YMCA 体育主事のマクロイ (Charles H. McCloy) が体育主任をしていた。YMCA 体育主事のエクスナーは 1911 年にはすでに兵操主体の日本式体育を批判していた。Max J. Exner, *Report*, 1910–1911.
- (146) T. I. Zung [唐增輝], “Military Preparedness,” *SJE*, January, 1920.
- (147) Zung Tsoong-iung, “Demobilization of the Battalion,” *SJE*, September, 1920.
- (148) T. I. Zung, “St. John’s Boy Scout Troop,” *SJE*, October, 1920.
- (149) 王晋麗「童子軍在中国」、修士論文、華中師範大学、2006 年、8–14 頁。
- (150) K. B. Young, “The Preparatory Interclass Meet,” *SJE*, June, 1914; K. T. Tsoong, “Boy Scouts,” *SJE*, December, 1914; K. T. Tsoong, “Boy Scouts Formed in Extension School,” *SJE*, May, 1915.
- (151) 「童子軍偵探隊之説明」『進歩雑誌』第 8 卷第 3 号、1915 年 6 月。
- (152) 「紀事二」同前。
- (153) A Medico, “The Boy Scout Movement,” *SJE*, October, 1917.
- (154) ベーデン＝パウエルオリジナルは「I will do my duty to God and the King」である。国によって文言には若干の違いがある。

- (155) 「童子軍偵探隊之頌詞」『進歩雑誌』第8巻第3号、1915年6月。
- (156) Alan Penn, *Targeting Schools: Drill, Militarism and Imperialism*, Woburn Press, 1999; J. A. Mangan and Hamad S. Ndee, “Military Drill—Rather More Than ‘Brief and Basic,’: English Elementary Schools and English Militarism,” in J. A. Mangan ed., *Militarism, Sport, Europe: War without Weapons*, Frank Cass, 2003.
- (157) Richard A. Swanson, Betty Spears, *History of Sport and Physical Education in the United States*, Brown & Benchmark, 1995, fourth edition; 榊原浩晃「イギリス初等教育草創期における Mathias Roth の体育授業導入提案」『福岡教育大学紀要』第5分冊、第55号、2006年、小田切毅一「アメリカ体育振興協会に参集した体育家たち：体育専門職成立の歴史的幕開けを振り返る」『体育学研究』第55巻第2号、2010年12月、など。
- (158) したがって、「国内でもっとも早く系統的な体育教育を進めた大学」（楊禾豊「聖約翰大学の校園生活及其変遷（1920-1937）」、博士論文、復旦大学、2008年）という評価は正しくない。
- (159) F. C. Cooper, *op. cit.*
- (160) F. C. Dzung, “Physical Exercise by Mr. Geo. Cooper,” *SJE*, December 20, 1898.
- (161) John Mo, *op. cit.*, pp. 11-12.
- (162) K. C. Tsha, “The Chinese Student and Physical Education,” *SJE*, December, 1907.
- (163) 前掲蘇公雋「我所了解的聖約翰大学」。
- (164) E. L. Sanford, “Fall Report on Physical Training,” *SJE*, November, 1918.
- (165) John Mo, *op. cit.*, pp. 7-8.
- (166) 葉宏開、韋慶媛、馮茵編『挺起胸來：清華大学百年体育回顧（上）』清華大学出版社、2009年、11頁。
- (167) W. Z. L. Sung [沈嗣良], “Report on Physical Training,” *SJE*, March, 1920.
- (168) *Ibid.*
- (169) Wen-Hsin Yeh, *op. cit.*, p. 72.
- (170) 前掲楊禾豊「聖約翰大学の校園生活及其変遷」。
- (171) 『民国日報』1925年10月4日。
- (172) 『申報』1925年10月6日。
- (173) 『申報』1925年10月14日。
- (174) 『民国日報』1925年10月16日。
- (175) 『申報』1925年10月17日、『時報』1925年10月19日。
- (176) 『申報』1926年3月14、18日、4月1、17日。
- (177) 1935年に中央大学と金陵大学が退出し、1936年に上海大学体育協会と改まるが、大学間の意見対立のため、活動停止状態のまま戦争を迎えた。前掲上海体育志編纂委員会編『上海体育志』114-115頁。
- (178) 前掲高嶋「極東選手権競技大会とYMCA」、同『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012年、19-23頁。
- (179) 有山輝雄『甲子園野球と日本人：メディアのつくったイベント』吉川弘文館、1997年、20頁。第一高等中学校は1894年に第一高等学校と改称した。
- (180) 前掲高嶋「『東亜病夫』とスポーツ」。
- (181) 校友会については、前掲楊禾豊「聖約翰大学の校園生活及其変遷」第5章を参照。